

鳥類

① 名古屋市における鳥類の概況

名古屋市内に野生する鳥類をまとめた報告は、武内功（1959）の「名古屋地方の鳥」（中部日本自然科学調査報告第3報）に34科150種が記述されて以来、久しく出なかった。しかし、以後調査が行われなかった訳ではなく、有志による地域的な調査は続いてきた。また日本野鳥の会等が主催する探ryousei鳥会が各地で行われ、それらの成果の概略は同会愛知県支部（旧名、名古屋支部）が発行する支部報等に随時掲載されたが、市全体の鳥相調査を目的としていないため、対象地が偏る傾向は否めなかった。

一方、組織的な調査としては、「名古屋市野鳥生息状況調査」が1975年以降ほぼ5年ごとに行われ、「名古屋の野鳥」（1976, 1981, 1986, 1991, 1996, 2001, 2006, 2010）という冊子にその成果がまとめられてきた。この一連の調査は1975年の初回（5、7、9、11、12月に実施）を除き、4月から翌年3月まで毎月一回のペースで行なわれ、決められた調査員が実施したセンサスの結果を、種ごとに1～3羽、4～10羽、11～50羽、51～500羽、501～1000羽、1001羽以上の6段階に分け、記号化して記している。

もっとも、名古屋市が行なったこの生息状況調査も、「区」別の状況を調べるのが目的でないため、調査地の選定に偏りがあり、1970年代には北区、西区、中村区、中川区内に調査地が無いなど、初期には東に重く西に軽い傾向が顕著であった。しかし、その後、次第にこの偏りは改善され、各区の調査密度は平均化されつつある。

そのほか最近の新しい試みとしては、なごや生物多様性保全活動協議会が一般市民の協力を得て、市内45ヶ所で行った調整結果が「なごや丸ごと鳥さがし!!」（2012）として公表されている。

またそれらとは別に1967年以降、愛知県が日本野鳥の会名古屋支部（1982年以降は愛知県支部と改称）に委託し、県内複数地点で毎月行っている「愛知県野生鳥類生息調査」（略して「定点調査」）があり、名古屋市内では千種区平和公園（1967～）、天白区平針（1968～）、港区庄内川河口（1992～）の3地点の記録が掲載されている。また近隣地域の記録としては、愛知県弥富野鳥園から1967年以降、毎月の鳥類調査結果が、半年ごとに発行される「野鳥園だより」に公表されており、更に2012年以降中日本高速道路株式会社名古屋支店ほかが行っているサギ類の調査結果が「東名阪自動車道弥富IC・蟹江ICに飛来営巣するサギと高速道路との共生に向けた活動報告」に公表されている。

これらの調査結果から、名古屋市に野生する鳥類の分類別種数と繁殖種名をまとめると、表5のようになる。

表5 名古屋市に野生する鳥類の分類別種数と市内で繁殖記録のある種

目	科	種数 名古屋市/全国	繁殖種
キジ	キジ	3 / 5	キジ
カモ	カモ	24 / 56	マガモ、カルガモ
カイツブリ	カイツブリ	4 / 5	カイツブリ
ハト	ハト	2 / 11	キジバト
ミズナギドリ	ミズナギドリ	3 / 22	
コウノトリ	コウノトリ	1 / 2	
カツオドリ	グンカンドリ	1 / 2	
	ウ	2 / 4	カワウ
ペリカン	サギ	13 / 19	ヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、アマサギ、アオサギ、コサギ
	トキ	3 / 4	
ツル	クイナ	6 / 14	ヒクイナ、バン
カッコウ	カッコウ	4 / 11	
ヨタカ	ヨタカ	1 / 1	ヨタカ
アマツバメ	アマツバメ	3 / 4	
チドリ	チドリ	10 / 15	ケリ、イカルチドリ、コチドリ、シロチドリ
	セイタカシギ	1 / 2	
	シギ	34 / 58	イソシギ
	レンカク	1 / 1	
	タマシギ	1 / 1	タマシギ
	カモメ	17 / 45	コアジサシ
	トウゾクカモメ	2 / 4	
タカ	ミサゴ	1 / 1	
	タカ	12 / 25	ハチクマ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ
フクロウ	フクロウ	6 / 11	フクロウ、アオバズク
サイチョウ	ヤツガシラ	1 / 1	
ブッポウソウ	カワセミ	4 / 8	カワセミ
	ブッポウソウ	1 / 1	
キツツキ	キツツキ	5 / 12	コゲラ
ハヤブサ	ハヤブサ	4 / 8	
スズメ	ヤイロチョウ	1 / 2	
	サンショウクイ	1 / 2	
	コウライウグイス	1 / 1	
	カササギビタキ	1 / 2	
	モズ	4 / 8	モズ
	カラス	3 / 11	ハシボソガラス、ハシブトガラス
	クイタダキ	1 / 1	
	ツリスガラ	1 / 1	
	シジュウカラ	4 / 7	ヤマガラ、シジュウカラ

目	科	種数	繁殖種
		名古屋市/全国	
スズメ	ヒバリ	1 / 6	ヒバリ
	ツバメ	4 / 8	ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ
	ヒヨドリ	1 / 2	ヒヨドリ
	ウグイス	1 / 2	ウグイス
	エナガ	1 / 1	エナガ
	ムシクイ	5 / 15	
	メジロ	1 / 3	メジロ
	センニュウ	1 / 6	
	ヨシキリ	2 / 7	オオヨシキリ、コヨシキリ
	セッカ	1 / 1	セッカ
	レンジャク	2 / 2	
	ゴジュウカラ	1 / 1	
	ミソサザイ	1 / 1	
	ムクドリ	2 / 7	ムクドリ
	カワガラス	1 / 11	
	ヒタキ	24 / 51	トラツグミ、キビタキ
	イワヒバリ	1 / 3	
	スズメ	2 / 3	スズメ
	セキレイ	6 / 10	ハクセキレイ、セグロセキレイ
	アトリ	12 / 18	カワラヒワ
ホオジロ	9 / 27	ホオジロ	
20目 59科 270/563種(市内での繁殖種：56種)			

注) 分類は、日本鳥類目録 改訂第7版 (日本鳥学会, 2012) に拠った。

* : 名古屋市内では記録のない鳥類4目22科70種を加えると、日本全国での合計は24目81科633種となる。

合計の20目59科270種という数字は、日本全国24目81科633種（日本鳥学会，2012）に比べて種数で42.7%となり、一見少ないように見える。他都市の近年の資料が手許に無いため比較は出来ないが、カモ科（市内）24種/（全国）56種、サギ科13種/19種、トキ科3種/4種、チドリ科10種/15種、シギ科34種/58種などは全国有数の水鳥生息地藤前干潟（庄内川河口部一帯）あつての数値なので、そのような優れた鳥類生息地を持たない他都市よりは全体として豊かな数字ではないかと推測される。

しかし、その優れた干潟も、今後安定した鳥類生息地であり続けるかどうか疑わしい。環境の“多様性”を示す種数の多さは現状では保たれていても、環境の“豊かさ”を示す個体数は多くの種で減少しているからである。以下の各論でも繰り返し述べたが、周辺の淡水湿地の相次ぐ消失を含めて、当市の水辺環境は悪化の道を辿っているのが現実なのである。

この結果をもとに名古屋市の野鳥生息状況を、東部、中央部、西部に大別して概観すると、下記のようになる。

東部地域

北端の東谷山から南端に近い大高緑地まで、林地が散在しているため、比較的樹林生の種類に富んでいる。しかしその林地は年とともに減少し、ヨタカ、アオバズク等かつては普通に見聞できた種類を含め、樹林生の種類の個体数が激減していることも事実である。

また東部にはかつて水田や畑地、ため池等、自然に近い開けた環境が存在していたが、宅地開発の波に吞まれてそれらが姿を消すにつれ、ヨシゴイ、クイナ、ヒクイナ、バン、タマシギ等水辺生の種類を見る機会も少なくなった。

中央部地域

ほとんど都市化され、名古屋城周辺、鶴舞公園、興正寺、熱田神宮等に緑地が、天白川河口近くに水鳥の生息環境が存在するが、総じて地域の自然度は低く、種類も東部・西部に比べて少ない。

西部地域

まとまった林地は少なく、かつて水田や畑であったところは大規模に宅地化されて、自然度の高い区域は近年著しく減少している。そんな中であつて西区庄内緑地は多種の陸鳥が訪れる地として注目され、庄内川・新川沿いの水辺環境は貴重な水鳥生息地として著名である。後者には多種多数のシギ・チドリ類、カモメ類、カモ類、カワウ、サギ類が生息する。その一角にある藤前干潟は、一旦は市の廃棄物最終処分場に予定されたが、水鳥生息地としての国際的価値が見直され、処分場計画は撤回されて国の特別鳥獣保護区に指定され、さらに世界の湿地を保全するラムサール条約登録地にもなった。

大都市の一角にこのような環境が保全されることは特筆に価するが、この地域が将来に亘って豊かな水鳥の生息地であり続けるためには、この限られた地域内だけでなく周辺地域も含めた自然環境の厳しい管理・保全が不可欠である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回、名古屋市の RDB 掲載種とそのランクを判定するに当たり、これらの調査結果を全て入念に検討した（移動性の高い鳥類の生息状況を、名古屋市という比較的狭い地域で掌握するには、近隣地域での状況を検討することが不可欠であるため、前記の資料中、当市に近い市外各地の調査結果も判定の参考にした）。

こうして類別した結果は、絶滅危惧 I A 類（CR）2 種、絶滅危惧 I B 類（EN）7 種、絶滅危惧 II 類（VU）15 種、準絶滅危惧（NT）21 種、情報不足（DD）3 種、合計 48 種となった。

以下の種別の頁には資料の細かな内容に配慮して記述したが、原則として添付の地図には「名古屋の野鳥」8 回の調査結果をまとめ、1970 年代、1980 年代、1990 年代、2000 年代の「区」を単位とする分布状況を示した。ただし前述のように北区、西区、中村区、中川区の 4 区では 1970 年代の記録は無く、更に 1970 年代はこのような不十分な資料が 1 回分しか無いのに対して、1980 年・1990 年代はそれぞれ 2 回分、2000 年代は 3 回分の資料が合計されている（「名古屋の野鳥」の現地調査は発行年の 1 年前に終了していることにより、2010 年発行分の内容は 2000 年代に含められる）ため、この図だけから分布の推移を平等・正確に把握することはできない。またこの表示法ではその種が出現した調査地数や出現回数・期間・個体数等を明示することはできず、区内の 1 調査地で 1 回、1 羽だけ記録された場合でも、その区に「記録あり」と表示されているため、個体数の減少を主眼としたカテゴリーとは必ずしも合致しない面がある。

選定された 48 種の中には、名古屋市では近年増加の兆しを見せていミサゴが含まれている。減少傾向の顕著でないものを絶滅危惧種等とすることには矛盾があるように思われるが、近辺での繁殖状況は全く解っていないし、この種が将来に亘って安定的に増加していく可能性は現在のところ見えていないので、県や国の情報も勘案した上、敢えて RDB の対象種に含めた。

また、カテゴリーについて、現在個体数は少ないが、市内に比較的安定して生息している種（ヨシゴイ、ズグロカモメ、チュウヒ）、以前から市内では稀で、現在特に減少が目立つ訳ではない種（オオジシギ、セイタカシギ、アカアシシギ）、及び個体数は減っているが、県レベルよりはやや危急度が低いと判断された種（オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、コオバシギ、エリマキシギ）については、県より低いカテゴリーに入れた。

これとは別に、市内での生息環境が狭い等のため、危急度が高いと判断された種（クロツラヘラサギ、ヨタカ、フクロウ、コシアカツバメ、コイカル、メダイチドリ）は、県より高いカテゴリーに入れた。

その他、ウズラシギ、タカブシギについては、絶滅危惧 I B 類にすべきか迷う要素はあったが、現在の資料に拠る限り絶滅危惧 II 類が妥当と判断した

以下、種別の記述中の個体数は、そのほとんどを森井豊久氏（名古屋鳥類調査会会長、「名古屋の野鳥」に関する調査とまとめの責任者）の資料をお借りし、庄内川河口部を中心に、年間 140 回もの頻度で綿密に計数された成果から、その年最多の種別記録数を掲載した。同氏にはこれらの貴重な資料を提供願ったほか、数々の有益なご助言とご協力を頂いたことを記して、心からお礼申し上げたい。

（執筆者 小笠原昭夫）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各鳥類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

なお、この記載は、平成27年3月現在のデータに基づくものである。

【掲載種の解説（鳥類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会，2012）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会，2012）に準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 2 鳥類」（環境省，2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。写真は記録性を重視して、名古屋市内またはごく近郊で撮られたものを選び、撮影場所と年月日を明記した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が確認された地域について、各区ごと年代別に4区分（1970年代、1980年代、1990年代、2000年代）し、市内分布図として掲載した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【関連文献】

対象種の関連する文献を掲載した。文献名には以下の略号を用い、対象種の掲載頁を示した。

愛知83：愛知県，1983. 愛知の野鳥. 愛知県農地林務部.

愛知95：愛知県，1995. 愛知の野鳥. 愛知県農地林務部.

愛知02：愛知県，2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックあいち—動物編，愛知県環境部自然環境課.

愛知06：愛知県，2006. 愛知の野鳥2006. 愛知県環境部自然環境課.

愛知09：愛知県，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックあいち—動物編，愛知県環境部自然環境課.

繁殖78：(財)日本野鳥の会，1980. 鳥類繁殖地図調査. (財)日本野鳥の会.

分布88：(財)日本野鳥の会，1988. 動植物分布調査報告書（鳥類）. (財)日本野鳥の会.

- HBE1 : Cramp, S. et al. (ed.), 1977. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 1. Oxford University Press.
- HBE2 : Cramp, S. et al. (ed.), 1980. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 2. Oxford University Press.
- HBE3 : Cramp, S. et al. (ed.), 1983. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 3. Oxford University Press.
- HBE4 : Cramp, S. et al. (ed.), 1985. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 4. Oxford University Press.
- HBE8 : Cramp, S. et al. (ed.), 1994. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 8. Oxford University Press.
- HBW1 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 1992. Handbook of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.
- HBW2 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 1994. Handbook of the Birds of the World vol. 2. Lynx Edicions.
- HBW3 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 1996. Handbook of the Birds of the World vol. 3. Lynx Edicions.
- HBW4 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 1997. Handbook of the Birds of the World vol. 4. Lynx Edicions.
- HBW5 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 1999. Handbook of the Birds of the World vol. 5. Lynx Edicions.
- HBW9 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 2004. Handbook of the Birds of the World vol. 9. Lynx Edicions.
- HBW10 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 2005. Handbook of the Birds of the World vol. 10. Lynx Edicions.
- HBW15 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 2010. Handbook of the Birds of the World vol. 15. Lynx Edicions.
- HBW16 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 2011. Handbook of the Birds of the World vol. 16. Lynx Edicions.
- CBW1 : del Hoyo, J. et al. (ed.), 2014. Illustrated Checklist of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.

鳥類 <ペリカン目 トキ科>

クロツラヘラサギ *Platalea minor* Temminck et Schlegel

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	絶滅危惧 I B類

【選定理由】

かつて九州以外では迷鳥であったが、2008～2011年に毎年続けて渡来しており、定着性も示しているため、評価対象とした。世界に1,000羽前後しかしないとされる希少種で、保全には細心の注意で臨む必要がある。

【形態】

全長 60～70cm。体は白く、しゃもじ形の嘴と脚は黒い。後頭部に冠羽があり、繁殖期には冠羽と胸が黄色になる。若鳥は翼端が黒く、冠羽が短い。首と脚を伸ばして飛ぶ。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部に1～2羽が渡来している。

【県内の分布】

弥富市、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部に稀に渡来している。

【国内の分布】

毎冬、九州西部に複数渡来するほか、北海道、本州、四国、五島列島、奄美諸島、琉球諸島、南大東島にそれぞれ稀な渡来記録がある。

【世界の分布】

朝鮮半島北部、中国東部・東北部（推定）、のごく限られた地域で繁殖し、日本、中国南部、台湾、ベトナム北部などで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

7月頃、海沿いの小島の岩壁で繁殖し、越冬地では干潟、河口、湿地、水田等に生息する。浅い水中で、少し開いた嘴を振り子のように左右に振りながら、魚、貝、甲殻類、昆虫などを捕食する。ウー、ウーと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

2008年5～8月2→1羽、2009年4～12月1羽、2010年4～9月1羽、2011年4～5月、9月1羽と庄内川河口部に渡来・生息した。過去には無かった定着性を示したので、今後2羽以上飛来する可能性もあり、逆に途絶える可能性もある。世界的な希少種だけに、十分な保全対策が望まれる。

【保全上の留意点】

大陸では食用として卵採取や、湿地の減少・環境汚染が生息を脅かしていると言われる。当地では夏期を中心に記録されているが、現在のところ繁殖は考えられないので、採食場やねぐらの安全性の確保と、河口部を中心とした地形改変防止、湿地の縮小防止に尽力する必要がある。

【特記事項】

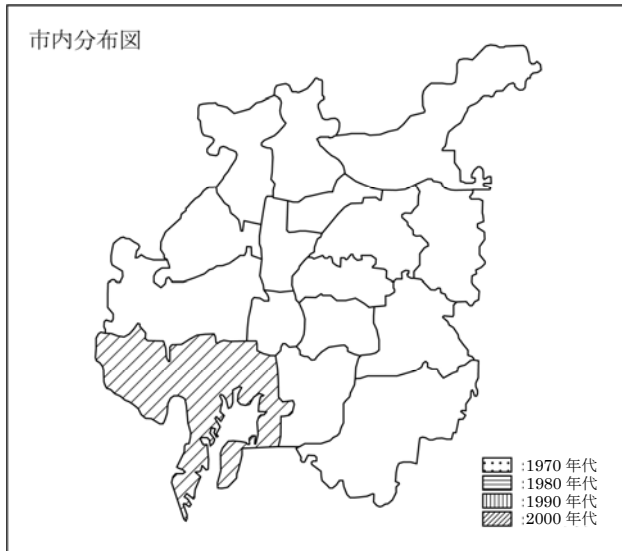
世界のレッドリスト（IUCN2014）でENに指定されている。

【関連文献】

愛知 83:243, 愛知 95:139, 愛知 06:19, 分布 88:65, HBW1:505, CBW1:394.



クロツラヘラサギ
港区庄内川河口、2010年4月11日、森井豊久 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ヨタカ目 ヨタカ科>

ヨタカ *Caprimulgus indicus* Latham

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧IA類
愛知県	繁殖	絶滅危惧IB類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【選定理由】

かつては夏期、市内各地に渡来し、鳴き声を聞く機会も少なくなかった。特に市東部（守山区～緑区）では夏期を通じて生息する地域も稀ではなく、繁殖の記録も散見されたが、近年著しく数が減り、市内で観察される機会は極めて稀になった。

【形態】

全長 28～30cm。体は黒褐色～灰褐色の虫食い模様で、雄には外側尾羽の先端部に小さな白斑がある。翼は細長く先端が尖り気味で、尾は長め。嘴は外見上小さく扁平だが幅が広く、大きく口を開くことができる。脚は短く歩行には適さない。

【分布の概要】

【市内の分布】

夏鳥として東部に広く渡来していたが、近年著しく減少した。

【県内の分布】

夏期、平野部～低山の林に生息し繁殖しているが、近年平野部では減少している。

【国内の分布】

九州以北に夏鳥として渡来し繁殖するが、各地で減少が伝えられる。

【世界の分布】

インド～中国～ウスリー地方などで繁殖し、高緯度のものは南下して越冬する。世界では特に減少の報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から低山帯の明るい林に生息する。県内での記録は4月～10月が主だが、11月の記録もある。日没後や夜明け前に林縁や草原上を飛び回り、大口をあけて昆虫類を捕食する。林内の地上に直接卵を産んで抱卵し、育雛する。細枝を脚ゆびでつかんで止まることは稀で、通常は横枝上に平行に、腹這い姿勢で止まる。夜間キョキョキョキョキョキョ……ときゅうりを刻むような声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

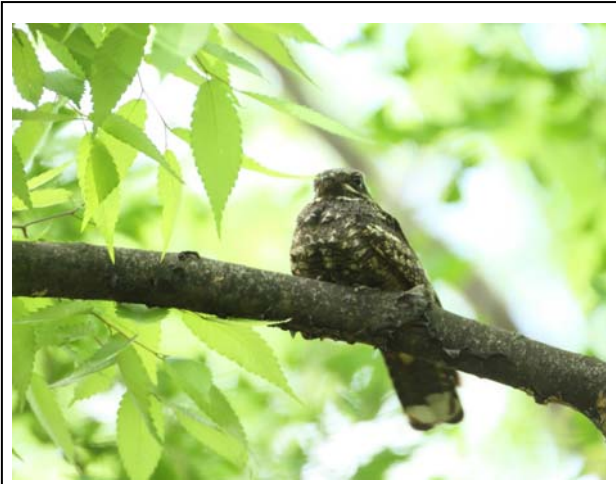
1970年代頃までは守山区、千種区、昭和区、天白区、緑区など市東部で広く繁殖の報告があり、1979年には少なくとも市内3ヶ所で繁殖していた。その後1994年に天白区で繁殖が確認され、守山区、緑区、熱田区で生息が確認されたのを最後に、1999年には、1975年以来の一連の調査で生息の記録が消えた（2003年5月東山植物園探鳥会では1羽観察されている）。生息地である林と、餌になる昆虫の減少が主な要因と考えられる。

【保全上の留意点】

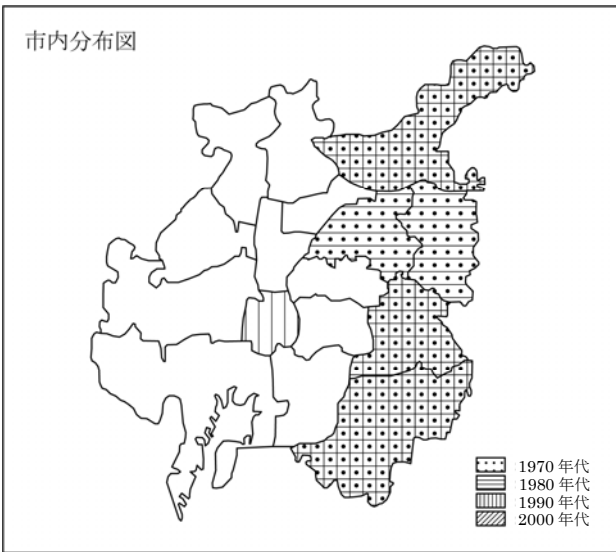
開発が進む都市部では難しいことだが、雑木林の保全が必要である。

【関連文献】

愛知 83:149, 愛知 95:85, 愛知 02:140, 愛知 06:86, 愛知 09:135, 繁殖 78:218, HBW5:359, CBW1:234.



ヨタカ
昭和田鶴舞公園、2010年5月9日、矢田和子 撮影



鳥類

(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <ペリカン目 サギ科>

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* (Gmelin)

【選定理由】

アシなどの生えた平地の水辺に普通に生息する夏鳥であったが、代表的な生息地であった庄内川、日光川河口付近でほとんど見られなくなったほか、近年市内ほぼ全域で急速に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類	
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠA類
2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧	

【形態】

全長 34~37cm。日本産では最小型のサギ。体は黄褐色で下面は上面より淡色。雌の下面には褐色の縦斑がある。頭上は雄が黒、雌が赤褐色。風切羽が黒く、飛ぶと雨覆羽の黄褐色との対比が鮮やか。幼鳥は下面が白く、黒褐色の縦斑がある。脚は黄色で、飛翔時尾端から後方にやや長く出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

東部、北部、南西部等おもに周辺部で記録されているが、1990年代後半からは南西部での記録が減少している。

【県内の分布】

鍋田干拓地、衣浦湾周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺等での記録があるが、いずれも減少の傾向にある。

【国内の分布】

主に夏鳥として渡来し、九州以北で繁殖するが近年減少が伝えられている。西日本では越冬するものもある。

【世界の分布】

アジア東部の熱帯~温帯、ミクロネシア、ニューギニア等で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

低地のアシ原、水田、湿地の草原等に雌雄または単独で生活し、群れることは稀。通常丈の高い草の中にひそみ、開けた所に出ることはほとんど無い。魚、カエル、ザリガニ、昆虫等を捕食する。5~8月頃アシやマコモの茎の間に草の葉や茎を用いて浅い椀形の巣を作り、5~6個の卵を産んで繁殖する。外敵が近づくと首を伸ばし、嘴を上に向けて周囲にまぎれる姿勢をとる。草の上を低く直線状に飛ぶ。低い声でオーオーと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

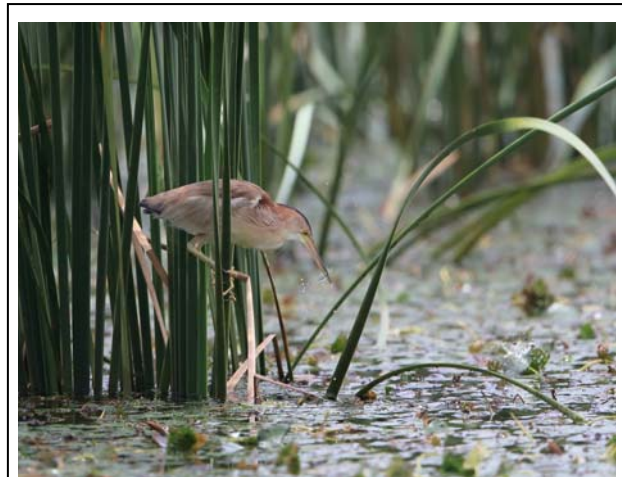
1990年代前半までは庄内川や日光川の下流部でもよく見られたが、近年減少した。名城公園や市東部のため池ではその後も記録が続き、特に緑区では毎年繁殖が確認されるほか、2001年、2002年、2003年、2004年、2005年、2006年と越冬も記録されたが、市全体としての個体数は減少している。生息環境の変化が主原因と考えられる。

【保全上の留意点】

水辺の丈の高い草原が生息地であるため、近年、市内でも減少傾向にあるアシ原を保全あるいは創出することが望ましい。

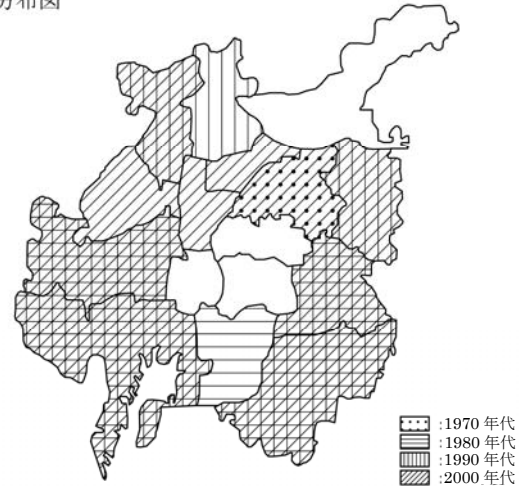
【関連文献】

愛知 83:27, 愛知 95:18, 愛知 02:82, 愛知 06:13, 愛知 09:105, 繁殖 78:58, 分布 88:49, HBW1:426, CBW1:400.



ヨシゴイ
緑区螺貝池、2014年8月13日、矢田和子 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ペリカン目 サギ科>

ミゾゴイ *Gorsachius gousagi* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県 2015	繁殖 通過 絶滅危惧ⅠB類 準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

世界でも日本だけでしか繁殖しない種で、詳しい情報はないが、個体数は漸減し1960年頃からは減少が加速している模様。沖縄や小笠原等離島特産の種に次いで、絶滅が懸念される。

【形態】

全長 46～52cm。頭は茶褐色。体の上面は暗い茶褐色。下面は淡い黄褐色地に茶褐色の縦縞があり、中央に黒褐色の縦斑がある。翼の風切羽は黒く、各羽の先端は茶褐色。嘴（サギ類にしては短い）は上嘴が黒く、下嘴は黄色。脚は暗緑色。

【分布の概要】

【市内の分布】

散発的に記録され、千種区では繁殖記録もある。

【県内の分布】

夏期、山地での観察記録があり、瀬戸市での繁殖記録もあるが、情報は乏しい。

【国内の分布】

主要四島のほか松前小島(北海道)、佐渡、隠岐、伊豆諸島で夏鳥として繁殖記録があり、南西諸島等には冬鳥として渡来するが数は少ない。

【世界の分布】

日本で繁殖したものが、中国南部、台湾、フィリピン等で越冬する。日本での減少がそのまま世界での減少につながる稀少種である。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期には沢沿いの山地の森に生息し、サワガニや魚、ミミズ等を捕食する。5～7月頃、杉等の樹上に巣を作り、通常3個の卵を産んで繁殖する。危険を感じると体を垂直に伸ばし嘴を上に向けて静止する擬態を行う。群れることはない。夕方や早朝、ウシガエルに似た声でポォー、ポォーと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

図に示した千種区（平和公園 1984年5月繁殖）、熱田区（熱田神宮 1989年6月1羽）のほか、千種区（平和公園 2005年5月1羽）、天白区（相生山 1988年10月1羽）、昭和区

（鶴舞公園 2001年5月成鳥、若鳥各1羽、2002年5月成鳥1羽）、緑区（若田橋 2005年10月1羽）など名古屋市調査以外の記録もあるが、情報は十分でない。繁殖地が日本に限られ、世界での総個体数が1,000羽未満と推定されるため、国外に繁殖個体群が存在するトキやコウノトリ以上に将来が危ぶまれる。

【保全上の留意点】

夏期、沢沿いの薄暗い森で繁殖し、渡りの際もおそらく森づたいに移動していく種類なので、そのような環境の保全が必要である。

【特記事項】

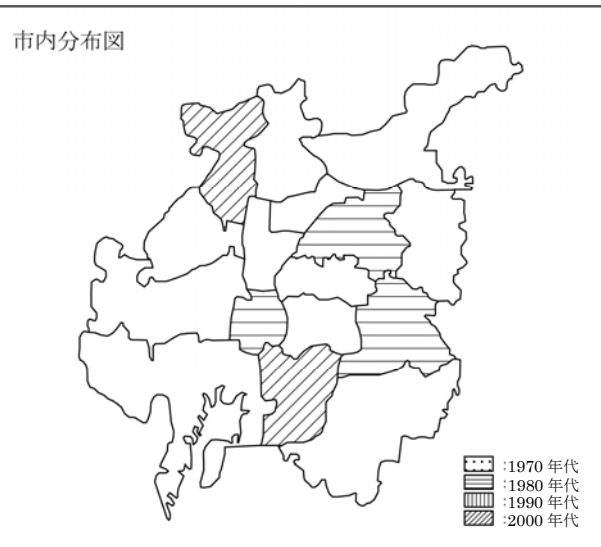
世界のレッドリスト（IUCN2014）では、絶滅危機（EN）に指定されている。

【関連文献】

愛知 83:28, 愛知 95:18, 愛知 02:83, 愛知 06:14, 愛知 09:105, 繁殖 78:64, 分布 88:51, HBW1:420, CBW1:400.



ミゾゴイ
昭和区鶴舞公園、2010年4月11日、矢田和子 撮影



（執筆 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray)

カテゴリー

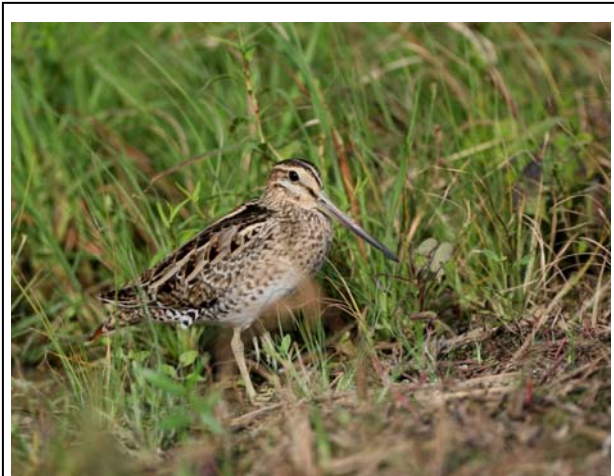
名古屋市2015		絶滅危惧ⅠB類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠA類
2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014		準絶滅危惧

【選定理由】

北海道を中心に、世界でもごく狭い地域だけで繁殖する種であり、名古屋市は渡りの中継地に当たっているが、近年ほとんど記録が途絶えて、絶滅の危険度が高まっていると考えられる。

【形態】

全長 28～32cm。体の上面は褐色地に多数の黒い斑紋があり、頭部は淡褐色（頭中央線、眉線、目の下の線、のど）と黒（頭側線、過眼線、頬の線）の縞模様をなす。胸、脇は淡褐色地に上胸部は黒褐色の細かな縦縞、下胸～脇には黒褐色の横縞があり、腹は白い。尾羽の先端近くに赤褐色の帯がある。嘴はまっすぐで7～8cmと長く、淡褐色で先が黒い。脚は灰緑色。同属のタシギとの識別に注意を要する。



オオジシギ
港区南陽町、2009年8月8日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

北東部と南西部で記録されている。

【県内の分布】

春・秋の渡り期に低地で少数観察され、1982年には南設楽郡作手村で繁殖が確認された。その後の繁殖記録はない。

【国内の分布】

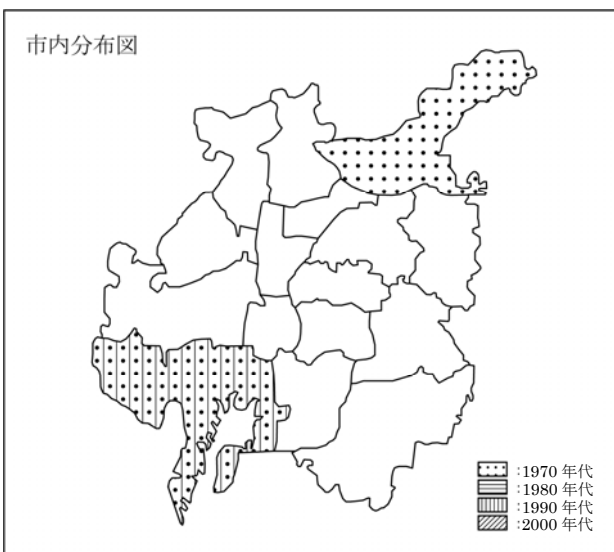
本州中部以北に夏鳥として渡来し繁殖する（北海道に多い）ほか、四国、九州にも稀な繁殖記録があるが、近年減少している。

【世界の分布】

サハリン南部、千島列島、ウスリー地方東南部で繁殖し、ニューギニア、オーストラリア東部、タスマニアで越冬する。世界的に減少していると考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

本州では山地、北海道では低地～山地の草原へ夏鳥として渡来し繁殖する。春・秋の渡り期には低地の水田や湿地に滞在し、ミミズのほか昆虫類やイネ科の種子等を食べる。繁殖期には空を飛び回りつつズビーズビー、ズビーヤク、ズビーヤクと鳴き立て、そのあと翼をすばめ尾羽を開いて急降下しながらザーザザザという音（尾羽が風を切る音）を出す。この独特なディスプレイから、雷シギの別名を持つ。



【現在の生息状況／減少の要因】

市内では1975年8月の守山区大久手池、同年9月の庄内川河口付近での記録以後、1990年9月港区南陽町で1羽、2014年9月庄内川河口で1羽など、ごく限られた記録しかない。県内での繁殖記録は途絶えたままだが、渡り期の記録も多くない。淡水湿地の減少が本種の生息域を狭めている可能性が高い。

【保全上の留意点】

市内では、専ら渡り期の滞在だが、水田等淡水湿地の保全が必要と考えられる。

【特記事項】

繁殖地が日本を中心にごく狭い区域に限られているため、日本での繁殖適地の縮小がそのまま種の衰亡につながっている可能性が高い。

【関連文献】

愛知 83:123, 愛知 95:70, 愛知 02:76, 愛知 06:71, 愛知 09:159, 繁殖 78:170, HBW3:492, CBW1:442.

（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

ツルシギ *Tringa erythropus* (Pallas)

【選定理由】

池畔や水田等で普通に見られた種類だが、近年急速に減少してきた。県全体でも 1980 年代半ば以降の顕著な減少が報告されている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I B類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧 II類

【形態】

全長 31~34cm。夏羽は上下面とも黒く、上面には白い小斑が密布している。目の周り
は白い。冬羽の上面は淡灰褐色で下面は白く、
胸側と腋に灰褐色の横縞模様があり、暗褐色
の過眼線と淡色の眉線がある。

夏冬とも飛ぶと背中に白い部分が出るが、
翼には目立つ模様は出ない。若鳥は成鳥の冬
羽に似るがより濃色で、下面全体に灰褐色の
横縞がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

西部でのみ記録されている。

【県内の分布】

平野部で広く記録されているが、数は顕著
に減っている。

【国内の分布】

主要四島を始め、小笠原を除くほとんどの
離島で旅鳥として記録され、本州中部以西で
は少数が越冬する。

【世界の分布】

ユーラシア北部で繁殖し、ヨーロッパ中緯
度域~アフリカ中部、アジア南部~インドネ
シアで越冬する。世界での個体数はほぼ安定
している。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河口部の干潟、海に近い水田、池沼
畔等に旅鳥として渡来するが、南下は大陸沿
いが主らしく、日本では春に多い。

春の渡りは他の旅鳥たちより早く、3 月上
旬に渡来し始める。海水域、淡水域どちらに
も生息し、昆虫類、小エビ、小貝、オタマジ
ヤクシ等を捕食する。チュイッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

おもに庄内川下流・河口付近で記録されて
いるが、近年急速に減少しており、1972 年 4
月庄内川河口で 320 羽、1975 年 4 月県内で
910 羽記録されていたものが、1998 年春には全国でも 468 羽と激減し、最近の市内では極めて稀に
なった。2006 年以降の記録は 2006 年 2 月 2 羽、2009 年 4 月 1 羽、2010 年 11 月 2 羽、2011 年 10
月 4 羽と、毎年 2 桁に届いていない。湿地環境の悪化がこの顕著な減少の主原因と考えられる。

【保全上の留意点】

全国規模の調査を密に行い、干潟の埋め立て、水田面積の変化等環境要因との関係を解析すると
同時に、自然度の高い湿地環境を保全・創出することが望ましい。

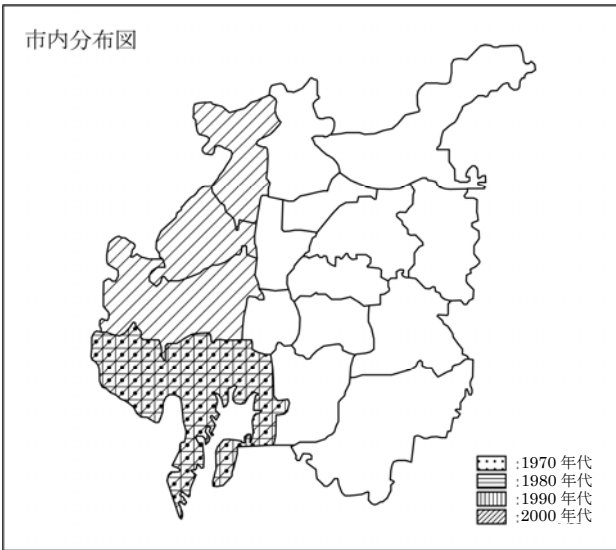
【関連文献】

愛知 83:107, 愛知 95:61, 愛知 02:102, 愛知 06:61, 愛知 09:129, 分布 88:167, HBE3:517, HBW3:509, CBW1:446.

(執筆 小笠原昭夫)



ツルシギ (冬羽)
港区藤高、2011 年 10 月 12 日、森井豊久 撮影



鳥類

鳥類 <チドリ目 タマシギ科>

タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus)

カテゴリー

【選定理由】

1960年代まで市内周辺部のあちこちで観察された本種が、現在極めて稀な種になり、市内では絶滅も懸念される。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県 2015	繁殖 絶滅危惧ⅠB類 通過 絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長雄約22cm、雌約26cm。先端が少し下に曲がった長い嘴を持つ。目の周囲の白、胸側の白帯と、背の前後に伸びた2本の黄色い線が目立つ。雄の方が地味な色をしており、上面は濃淡褐色の斑模様、喉～胸は灰褐色、腹は白色。雌の上面は黒褐色で細かな横縞模様があり、胸は赤褐色、腹は白色。若鳥は雄に似ている。

【分布の概要】

【市内の分布】

近年の記録は南西部だけにある。

【県内の分布】

平野部に広く留鳥として生息し、繁殖しているが、都市近郊では目立って減少している。

【国内の分布】

本州中部～南西諸島でほぼ留鳥とされるが、関東のものは冬期暖地へ移動するようである。

【世界の分布】

アジア南・東南部からオーストラリア、アフリカ、マダガスカル等で繁殖し、大きな季節移動はしない。世界での個体数に関する情報は不足している。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部の水田、休耕田、蓮田、湿地等で主にミミズや昆虫類のほか草の種子等も食べている。通常草蔭に隠れているが、クイナ類よりは開けた場所で見られる機会が多い。4～7月頃、草むらや稲株のくぼみ等に草の茎や葉で皿形の巣を作り、3～6卵（通常は4卵）を産んで繁殖する。雌が背を丸めてウウウ、ウウウと鳴いた後、両翼を上げて雄を誘う求愛の動作は独特。雌はコーコーコー…とも鳴く。一妻多夫で抱卵・育雛は雄が行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

ここ40年間の名古屋市の調査結果では、1999年、2004年、2008年に港区で観察された記録だけ。40年以上前の組織的な調査記録はないが、過去には現在よりは多数の本種が市内に生息していた可能性が高く、近年における水田や湿地などの縮小・消滅が減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

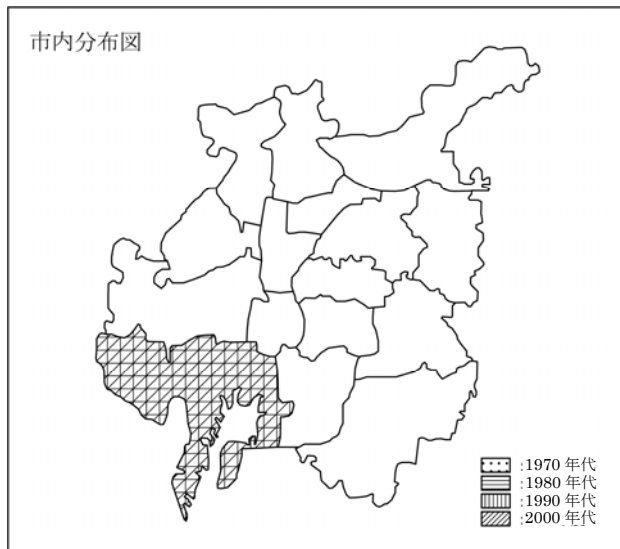
都市化による湿地環境の減少をくい止め、本種の生息しうる環境を計画的に育成・保全していくことが必要である。

【関連文献】

愛知 83:84, 愛知 95:47, 愛知 02:99, 愛知 06:47, 愛知 09:125, 繁殖 78:150, 分布 88:143, HBE3:10, HBW3:300, CBW1:434.



タマシギ (左:雌、右:雄)
海部郡飛島村、2013年9月10日、森井豊久 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

コノハズク *Otus sunia* (Hodgson)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I B類
愛知県 2015	繁殖 通過
環境省2014	絶滅危惧 I A類 準絶滅危惧 リスト外

【選定理由】

愛知県の県鳥に指定される等、かつては県内で比較的観察されやすい鳥であったが、近年県内、市内とも顕著に数が減ってきている。

【形態】

全長 19～22cm。日本産では最小のフクロウ類。体は灰褐色で上面には黒褐色や黄褐色の虫食い状の斑があり、下面には黒褐色の縦斑がある（全体が赤褐色がかった赤色型もある）。翼の下面は灰白色で、風切羽と尾羽には黒褐色の横縞がある。頭に短い羽角があり、目は黄色。嘴は黒い。

【分布の概要】

【市内の分布】

秋期、渡り途中のものが稀に記録される。

【県内の分布】

春・秋に平野部で散見されるほか、夏期、東三河の山地に生息し、ごく少数だが繁殖の可能性はある。

【国内の分布】

主要四島に夏鳥として渡来し繁殖するほか、佐渡、隠岐、対馬、南西諸島、伊豆諸島で渡り途中のものが記録されている。

【世界の分布】

ユーラシアの中緯度以南とアフリカで繁殖し、北部のものは南下して低緯度地域で越冬する。各地で減少しているというが、世界的に目立って減少はしていない。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、山地の深い森に生息し、夜間活動して主にミズスマシ、コガネムシ、蛾、バッタ、トビケラ等の昆虫を捕食する。5月上旬～6月中旬頃、スギ・ヒノキ等の林中の樹洞に産卵して繁殖する。日没後ブッキョッコウ（仏法僧）と聞こえる声で鳴くが、曇天時には昼間鳴くこともある。渡り期には市中の森等でも観察されるが、夜行性で秋には鳴かないので、記録は極く稀にしか得られない。人家や倉庫に飛び込んで保護されることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

1972年10月港区白水町で1羽、1973年10月港区船見町で1羽、天白区相生山では1974年10月に1羽、1977年10月に1羽、1994年10月に1羽、2004年5月に緑区大高緑地で1羽、2014年10月に天白区相生山で2羽等と散発的に観察されているほか、ほとんど記録は無い。周辺一帯の開発が主原因と考えられる。

【保全上の留意点】

市内に繁殖地はなく、渡り期の通過のみが記録されているが、このような森林生の種には、飛び石状にでも森が存在することが渡り続ける必要条件といえる。市内外の緑地を維持・管理することが、渡り中継地としてこの鳥の保全に不可欠である。

【特記事項】

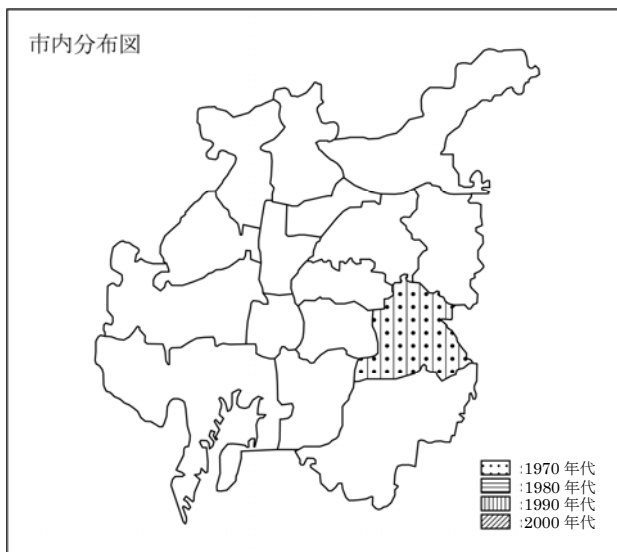
従来、ヨーロッパ、アフリカ、アジア産のものをまとめて *O. scops* としてきたが、近年、鳴き声やDNAの違いから細分化される傾向にあり、本種も *O. sunia* となった。

【関連文献】

愛知 83:145, 愛知 95:83, 愛知 02:77, 愛知 06:84, 愛知 09:100, 繁殖 78:212, 分布 88:220, HBE4:454, HBW5:164, CBW1:498.



コノハズク
天白区相生山緑地、1996年11月3日、後藤弘行 撮影



鳥類

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

フクロウ *Strix uralensis* Pallas

【選定理由】

大木が残る広い森と、それに隣接する耕地さえあれば、人家周辺にも生息できる種類だが、都市化が進む中でそのような環境は減少し続け、市内では本種に接する機会は近年特に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類	
愛知県	繁殖	準絶滅危惧
2015	越冬	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外	

【形態】

全長 48～52cm。上面は灰褐色で褐色や黒褐色の縦斑がある。下面は白地に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は淡褐色地に黒褐色の横縞がある。尾には上下面とも黒褐色の横縞がある。頭は大きく、フクロウ類独特の平たい顔盤がある。目は黒っぽい。

【分布の概要】

【市内の分布】

近年は東北部にのみ記録がある。

【県内の分布】

低地から標高 1200m ぐらいまでの山地に生息するが、数は多くない。

【国内の分布】

主要四島のほか南千島、淡路島に留鳥として生息している。

【世界の分布】

ユーラシア大陸の中北部で繁殖し、目立った季節移動はしない。世界で特に減少しているとは見なされていない。



フクロウ
西区庄内緑地、2007年11月22日、矢田和子 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

大木のある低地～山地の森に周年生息し、夜間活動して主にネズミを捕食するが、時に小～中型の鳥や大型昆虫も食べる。老木の樹洞に営巣し、3～5月頃、2～4個の卵を産んで繁殖する。樹上に作られたタカ類の古巣を利用することもある。ホーホー、ゴロスケホーホーと低い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

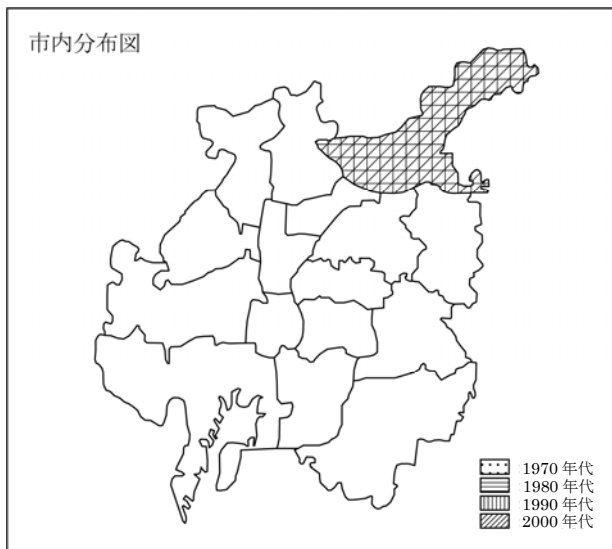
守山区の東谷山で5、6、8月に記録されていて繁殖の可能性はあるが、近年他地域では散発的な記録もない。大型の樹洞営巣種だけに、大木のある森林の減少と、都市化に伴う採餌場（耕地、林縁部等）の縮小が本種の生息を困難にしている。

【保全上の留意点】

生息環境の確保が第一だが、ここまで開発が進んでは困難なことと言わざるを得ない。せめて現存する緑地や社寺林を保全するとともに林内に巣箱を架設することで、回復を図ることができるかもしれない（尾張旭市、瀬戸市等では現在も巣箱が有効に利用されている）。

【関連文献】

愛知 83:148, 愛知 95:85, 愛知 02:139, 愛知 06:86, 愛知 09:167, 分布 88:223, HBE4:550, HBW5:203, CBW1:510.



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <カモ目 カモ科>

トモエガモ *Anas formosa* Georgi

【選定理由】

世界でもアジア東部に分布が限られた稀少種で、世界的に減少しており、名古屋市周辺でもかつて記録されたような大群は見られなくなった。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	越冬 絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長雄約 43cm、雌約 38cm。雄の顔には緑・淡黄・黒・白の独特な巴形の模様がある。胸は紫褐色で胸側に白線がある。背は灰褐色で、白・黒・茶色からなる数枚の長い肩羽が目立つ。雌は全身褐色の濃淡模様で、嘴の基部に小さく丸い白斑がある。雄のエクリプス（繁殖期後の換羽で生じるカモ類独特の羽毛）は雌に似ている。



トモエガモ
港区日光川河口、2013年12月20日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

主に西部に記録がある冬鳥。地域、年により数に変動があるが近年減少している。

【県内の分布】

東郷町愛知池で1975年1月に約2千羽、1976年2月に約5千羽が記録され、木曾川下流部で2万羽以上記録されたことがあるが、近年の渡来数は激減している。

【国内の分布】

本州の東北地方中部以南（日本海側に多い）、四国・九州等に渡来する。

【世界の分布】

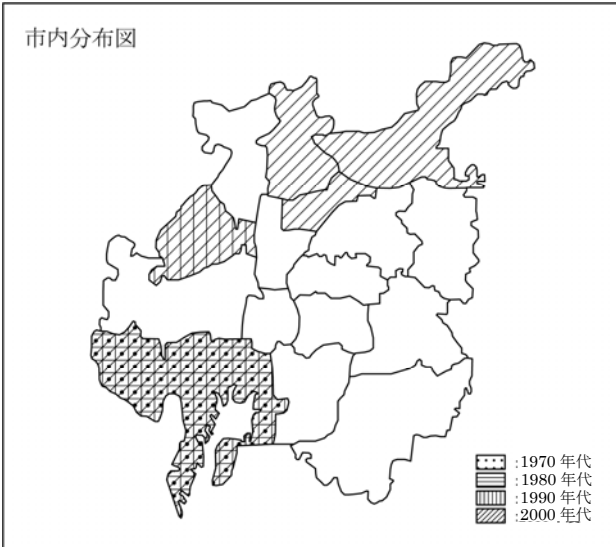
アジア東部の高緯度域で繁殖し、南下して越冬するが、狩猟や生息環境の破壊により急激に減少したとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

冬期、河川の中・下流や湖沼、ダム湖などに生息する。他の水面採餌ガモと同じく、餌は草本の種子など植物質が主だが、水生昆虫やエビなども食べる。ココロ、またはククッと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口で1998年冬に500羽を越す群れが記録されたが、市内では2007年2月6羽、2007年12月50羽、2010年1月87羽、2011年1月8羽、2013年12月5羽（以上何れも藤前干潟周辺）と、少数渡来するのみの稀少種。地域、年により変動が激しい。減少の原因は明らかでない。



【保全上の留意点】

減少の原因が明らかでないため、それを食い止める方策も明示しにくいですが、河川、池沼など淡水域とその周辺、名古屋市では特に庄内川下流～河口部の環境保全は必要条件であると考えられる。

【関連文献】

愛知 83:42, 愛知 95:26, 愛知 02:94, 愛知 06:25, 愛知 09:118, 分布 88:80, HBE1:494, HBW1:602, CBW1:142.

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類

鳥類 <ツル目 クイナ科>

ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus)

【選定理由】

1960年代まで市内周辺部の各地で繁殖していたが、都市化、特に水田・池沼の消失により、著しく減少した。

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	通過	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長 22～24cm。上面は暗緑褐色、下面は顔から腹まで暗い赤褐色で、下尾筒は黒褐色に白い横縞模様がある。尾は短め、脚は長めで赤い。飛んだとき、翼に模様は出ない。

【分布の概要】

【市内の分布】

主として東部の水辺に生息する。

【県内の分布】

平野部に広く生息し繁殖しているが、三河部が中心で、尾張部での記録は比較的少ない。

【国内の分布】

九州から北海道までほぼ全域に夏期渡来し繁殖しているが、北日本には少ない。対馬、伊豆諸島等では冬鳥。

【世界の分布】

アジア南部・南東部～インドネシア、フィリピン、台湾等で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、河川、池沼、水田、アシ原などの淡水性の湿地に生息し、昆虫類、魚類、甲殻類のほか草の種子などを食べている。岸辺の草むらのような狭い場所でも繁殖するが、草蔭に隠れて行動するので、人目に止まる機会は多くない。6～7月頃、草むらや稲株の間に草の茎や葉で皿形の巣を作り、5～9卵を産んで繁殖する。キョッキョッキョッキョキョキョ…と次第に早口になる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部のため池等に広く分布していたが、近年急速に減少した。湿地環境の減少が本種の生息域を狭めていると考えられる。

【保全上の留意点】

宅地を水田に戻すことはできないが、現在残っている水田やため池を保存し、特に草の生えた湿地環境を保全することが必要である。

【特記事項】

2004年2月、天白区の天白公園でクイナ2羽と共に越冬中の本種1羽が確認された。本州中部以東での越冬は珍しい。

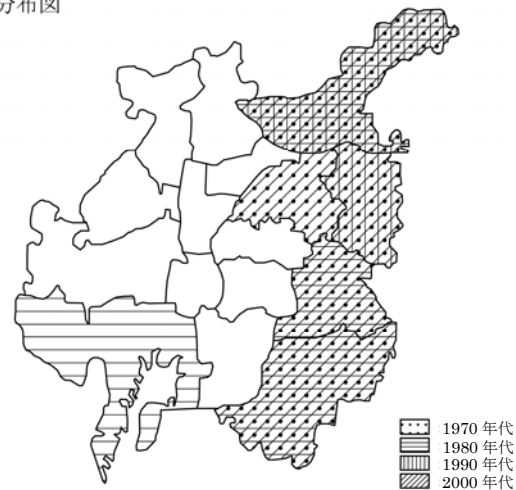
【関連文献】

愛知 83:81, 愛知 95:46, 愛知 02:98, 愛知 06:45, 愛知 09:124, 繁殖 78:144, 分布 88:138, HBW3:187, CBW1:348.



ヒクイナ
緑区螺貝池、2010年6月25日、矢田和子 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

オグロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus)

【選定理由】

海水域、淡水域の両方で採餌する種だが、近年渡来数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類
	リスト外

【形態】

全長 34~42cm。雄の夏羽では頭部~胸が赤褐色で、体の上面は赤褐色と黒と白の斑、上尾筒と尾の基半部は白く先端は黒い。翼を広げると黒い風切羽に白い帯が出る。胸側~脇には黒い横斑があり腹は白い。嘴は平均9cmと長くまっすぐで、先は黒く基部は淡紅色。脚は長く黒い。雌の夏羽は雄に似るが、赤みが薄い。冬羽の上面は雄・雌とも灰褐色で淡色の羽縁があり、眉斑と喉は白く首~胸は灰褐色。若鳥は成鳥の冬羽に似るが褐色味を帯び、上面に黒褐色の小班がある。



オグロシギ
港区庄内川河口、2012年9月14日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

南部、ことに南西部に記録が集中している。

【県内の分布】

鍋田地区、矢作川河口部周辺、汐川干潟周辺に渡来する。

【国内の分布】

小笠原諸島、伊豆諸島、大東諸島を除くほぼ全国に旅鳥として渡来し、九州では越冬するものもある。

【世界の分布】

ユーラシア中緯度域、イギリス、アイスランドで繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ中・北部、アジア南部、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアへ渡って越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

4~5月と8~10月に海岸や河口の干潟、海に近い水田等に渡来するが、春より秋に多い。昆虫類、クモ類、貝類、ゴカイ、ミミズ、小魚等を捕食する。キッキッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

中川区、港区、南区、緑区に渡来しているが、1980年代半ば以降、個体数は、2010年の例外を除いて下記のように減少している。

1983年9月95羽、1986年10月31羽、2003年9月57羽、2010年9月106羽(この年の多さは'83年以来) 2014年9月12羽。水田等淡水環境の縮小が主原因で数が減ったのではないかと考えられる。

【保全上の留意点】

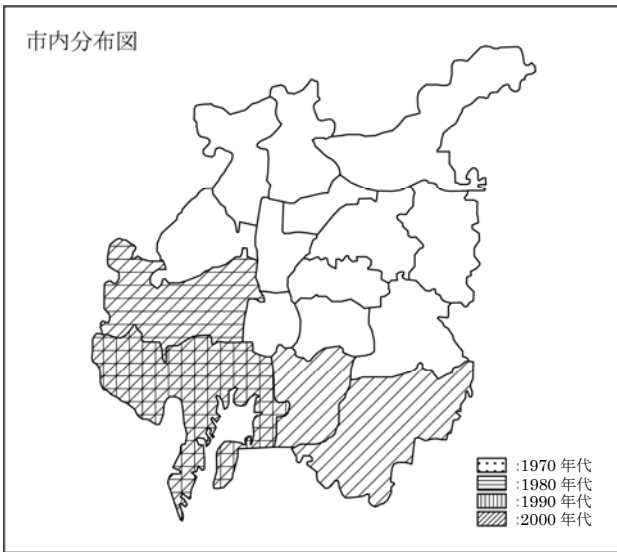
近年の個体数減少の詳しい理由は不明だが、当面湿地環境の保全を図りながら、他地域とも連携して渡来及び生息状況の綿密な解析を続ける必要がある。

【特記事項】

世界のレッドリスト (IUCN2014) で、NTに指定されている。

【関連文献】

愛知 83:116, 愛知 95:66, 愛知 02:104, 愛知 06:67, 愛知 09:131, 分布 88:178, HBE3:458, HBW3:501, CBW1:436.



鳥類

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* (Linnaeus)

カテゴリー

【選定理由】

名古屋市南西部を渡りの中継地として利用しているが、1980年代に比べ1990年代以後は明らかに減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 54~68cm。上・下面とも淡褐色地に黒褐色の斑点があり、ダイシャクシギに酷似するが、腰、下腹部、翼下面が白くない点で異なる。嘴が平均 16.5cm と非常に長く、大きく下に曲がっている特徴等ダイシャクシギと共通で、外形だけでは両種の識別はできない。



ホウロクシギ
海部郡飛島村飛島干潟、2012年5月4日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部でのみ記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、三河湾沿岸部に渡来する。

【国内の分布】

ほぼ全国に旅鳥として渡来し、本州、九州の一部、琉球等に少数越冬記録がある。

【世界の分布】

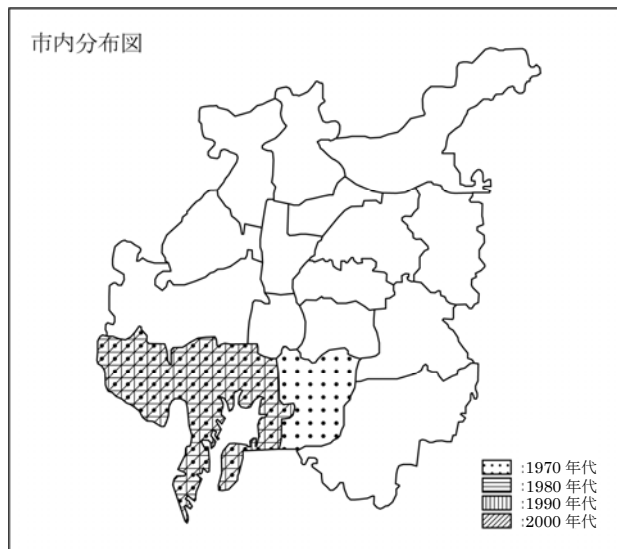
中国東北部、沿海州、カムチャツカ等で繁殖し、台湾、ボルネオ南東部、セレベス、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。(繁殖・越冬地ともほとんどダイシャクシギとは重ならない)。世界的に減少していると見なされている。

【生息地の環境／生態的特性】

主として4~5月と8~10月頃渡来し、広い干潟でカニ、シャコ、貝、ゴカイ、小魚、昆虫類等を捕食する(内陸の湿地へ入ることも多く、満潮時には農地で見られることもある)。12月、1月、3月にも観察されているが、名古屋市での越冬記録はない。カーリユ、ホーイーン、クーヒー等と聞こえるよく通る声で鳴き、ダイシャクシギと聞き分けることは難しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

ダイシャクシギとともに、庄内川河口~木曾川河口付近が県内でも有数の渡来地で、1980年代には毎年25~30羽(1987年5月に28羽など)が飛来していたが、1990年8月9羽、2003年5月7羽と近年は1桁になった。名古屋市だけでなく周辺を含めた広い干潟の減少と後背地の環境悪化が減少の要因であろうと推測される。



【保全上の留意点】

広い干潟の保全と沿岸部での湿地を保全・創出することが望ましい。

【特記事項】

世界のレッドリスト (IUCN2014) で VU に指定されている。

【関連文献】

愛知 83:119, 愛知 95:67, 愛知 02:105, 愛知 06:68, 愛知 09:132, 分布 88:181, HBW3:505, CBW1:436.

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

タカブシギ *Tringa glareola* Linnaeus

【選定理由】

かつて春・秋に普通に見られた種であるが、1980年代半ば以降著しく減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 20～23cm。夏羽の上面はほぼ黒褐色で白い斑点が散在する。上尾筒は白く、尾には白地に黒い横縞がある。下面は白く、顔～胸に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は白く、上面に白帯などの目立つ模様はない。冬羽は全体にやや色が薄れてコントラストの弱い色あいになる。脚は緑がかかった黄色で長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

春と秋、南西部を中心に東部、北部等にも記録がある。

【県内の分布】

平野部で広く記録され、渡り途中の春・秋のほか少数越冬もする。

【国内の分布】

北海道・南千島～南西諸島を始めほぼ全域で記録があり、本州中部以西（南）では越冬するものもある。

【世界の分布】

ユーラシア北部（極北部は含まない）で繁殖し、アフリカ、アジア南部～オーストラリアに渡って越冬する。世界での個体数はほぼ安定していると見なされている。

【生息地の環境／生態的特性】

春・秋に、水田、休耕田、池沼畔等淡水性湿地に渡来する。単独または小群で生活し、昆虫類、クモ類、小貝等を捕食する。ピッピッピッピッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980年代までは4～5月、8～9月に、港区、南区、緑区、天白区、名東区、守山区でよく観察されたが、近年市内では2012年4月1羽、2013年9月2羽（何れも港区藤高）などの記録が散見される程度に減少した。淡水性湿地の減少が原因である可能性が高い。

【保全上の留意点】

淡水域に生息する種なので、水田、休耕田等の淡水性湿地を保全することが必要である。

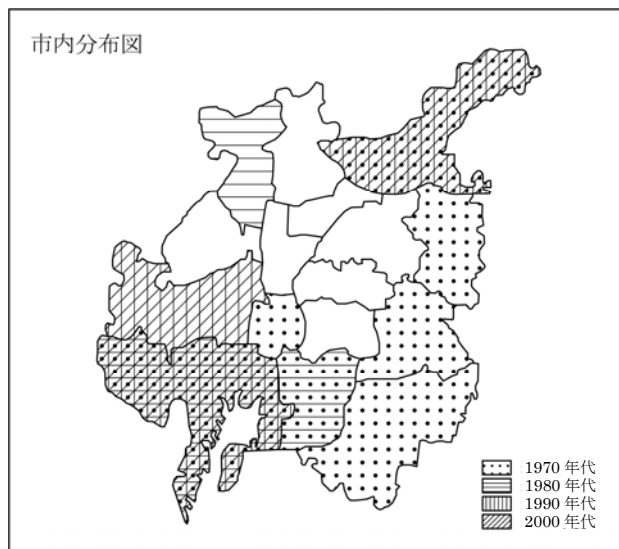
【関連文献】

愛知 83:112, 愛知 95:63, 愛知 02:103, 愛知 06:64, 愛知 09:130, 分布 88:173, HBE3:577, HBW3:512, CBW1:448.

(執筆 小笠原昭夫)



タカブシギ
港区藤高、2012年4月18日、森井豊久 撮影



鳥類 <チドリ目 シギ科>

ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield)

カテゴリー

【選定理由】

原因はまだ解明されていないが、近年渡来数が顕著に減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類
	リスト外

【形態】

全長 20～23cm。夏羽では頭上は茶褐色に黒い縦斑、体の上面は褐色に黒褐色の小斑、胸は淡褐色地に黒褐色の縦斑、腹は白く脇に黒褐色の小斑がある。冬羽では茶褐色味が淡くなる。若鳥の体の上下面は成鳥より黄褐色味が強い。やや下に曲がった嘴は黒っぽく、脚は黄緑色。



ウズラシギ (夏羽)
港区南陽町、1991年8月18日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部で記録されているが数は少ない。

【県内の分布】

鍋田地区、矢作川河口付近、汐川河口部周辺等で記録されているが、やはり数は少ない。

【国内の分布】

ほぼ全国に旅鳥として渡来するが、近年数が減っている。

【世界の分布】

シベリア極北部のごく限られた地域で繁殖し、ニューギニア、トンガ、ニューカレドニア、オーストラリア、ニュージーランド等へ渡って越冬する。世界で特に減少しているとの情報は無い。

【生息地の環境／生態的特性】

春・秋に水田や休耕田など、主として淡水の湿地を訪れ、昆虫類、トビムシ等のほか、草の種子等の植物質も摂る。干潟にも出るが、農地で見ることが多い。比較的多く渡来していた1970年代には春、雄の求愛ディスプレイが見られたこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口部を中心に記録され、似た環境に生息するツルシギとともに近年激減した種の一つ。1978～82年の県内での記録は60～100羽であったが、最近では数羽の記録しかない(庄内川河口部周辺での近年の観察例：

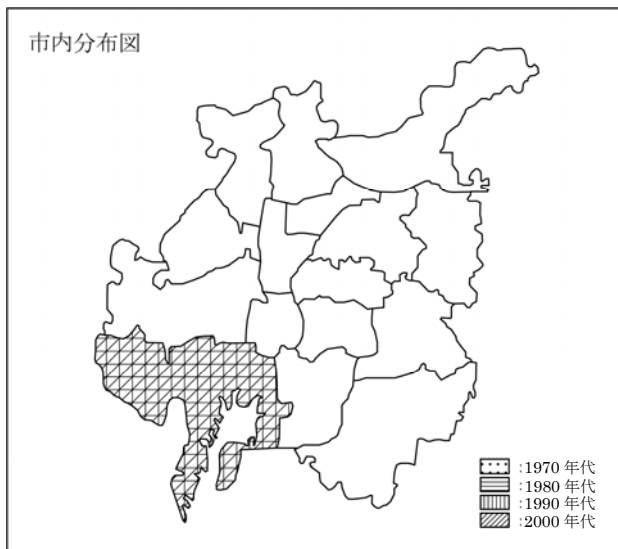
2007年5月3羽、2010年8月1羽、2013年9月1羽)。減少の要因は明確でないが、生息環境(本種やツルシギの場合は特に水田、休耕田等の淡水域)の改変や質の低下が生息に重大な影響を及ぼしている可能性がある。

【保全上の留意点】

まず淡水環境の保全を図りながら、本種を始めとする水辺鳥類の個体数変動を詳しく解析することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:97, 愛知 95:56, 愛知 02:100, 愛知 06:56, 愛知 09:127, HBE3:336, HBW3:524, CBW1:438.



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 カモメ科>

ズグロカモメ *Larus saundersi* (Swinhoe)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	越冬 絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市近辺では近年漸増の傾向にあるが、繁殖地がアジア東部のごく限られた地域であるため、一旦衰亡に向かうと絶滅の危険性が高い。

【形態】

全長 29～33cm。背と翼の上面は淡い青灰色。初列風切の前側は白く、先端に黒斑がある。胸～腹と尾は白い。嘴は短めで黒く、脚は赤い。頭部は冬羽では白く、目の後ろに黒斑があるが、夏羽では頭全体がまっ黒になる。若鳥は翼に黒斑、尾の先端には黒帯があり、脚は褐色。ユリカモメに似るが小型で、嘴の長さや色が異なるほか、翼端の黒斑の並びの模様等も異なる。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部で冬期記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部と汐川干潟で 1980 年代半ばから少数が定期的に越冬している。

【国内の分布】

北海道～南西諸島、伊豆諸島に渡来しているが、九州以外では少ない。

【世界の分布】

中国東部のごく狭い地域で繁殖し、ロシア極東部、朝鮮半島、中国等で越冬する。世界での総個体数は 5 千羽以下と推測されている。

【生息地の環境／生態的特性】

冬期海浜に渡来し、干潟の上を飛翔しながら、舞い降りてカニやゴカイを捕食する。ユリカモメの群中にもいることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では 1985 年 2 月庄内川河口での記録以来、滞在期間、個体数とも漸増し、近年は毎冬 10 羽以上が越冬するようになった(2008 年 11 月 10 羽、2010 年 3 月 12 羽、2011 年 2 月 15 羽、2012 年 2 月 23 羽、2012 年 12 月 21 羽、2013 年 3 月 22 羽、2014 年 1 月 25 羽)。

【保全上の留意点】

上述のように、記録は近年増加しているが、繁殖地が限られた狭い区域であり、越冬地・繁殖地連繋しての保全が求められる。

【特記事項】

1984 年に中国東部で初めて繁殖が確認された。繁殖地周辺が農地やエビ養殖池として開発されつつあり、このまま進めば近い将来絶滅するとの警告も出されている。

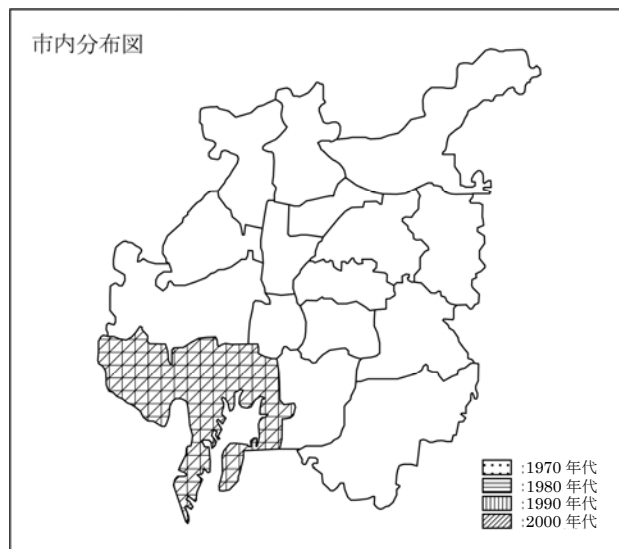
世界のレッドリスト (IUCN2014) で VU に指定されている。

【関連文献】

愛知 83:252, 愛知 95:75, 愛知 02:89, 愛知 09:112, 分布 88:197, HBW3:617, CBW1:456.



ズグロカモメ (冬羽)
港区庄内川河口、2013 年 4 月 21 日、森井豊久 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 カモメ科>

コアジサシ *Sterna albifrons* Pallas

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠB類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

夏鳥として渡来し市内で繁殖もしているが、近年減少している。広い砂礫地での集団繁殖という習性は、開発が進む現況とは相容れ難い。

【形態】

全長 21~31cm。先の尖った長い翼と深く切れ込んだ尾が特徴。背と翼の上面は淡青灰色で、上尾筒と尾と下面は純白。夏羽では頭上~後頭は黒く、嘴は黄色で先端が黒く、脚は橙黄色。冬羽では頭頂が白、嘴は黒、脚は褐色に変わる。若鳥は頭頂、後頭、背、翼の上面は淡褐色と暗褐色の斑模様で翼端は黒い。額と下面は白い。

【分布の概要】

【市内の分布】

海沿いの南部地域のほか、多くの区で記録されている。

【県内の分布】

平野部に広く分布し各地で繁殖している。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島に夏鳥として渡来し、各地で繁殖しているが、総数は減少しつつある。

【世界の分布】

ユーラシア、アフリカ、東南アジア、オーストラリア東岸等で繁殖し、北方のものは南下して越冬する。世界的に現在個体数は多いが、減少の傾向にある。

【生息地の環境／生態的特性】

4月中旬~10月上旬、南方から渡来し、海岸や河川、池沼等で小魚を捕食して生活する。5~7月頃、水辺に近い砂礫地で集団繁殖する。犬や人などの外敵が巣に近づくと、集団で威嚇攻撃をする習性がある。飛びながらクリクリッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

渡来地は市内に広く分布している。港区稲永ふ頭では、2002年、2003年にそれぞれ約250番い(つがい)が繁殖した(近郊の弥富市では1998年7月に、巣立った幼鳥を加えて約1,600羽が記録されている)。本市での主要生息地である庄内川河口付近では、1888年に3,000羽以上が記録された後、2009年5月には500羽となり、以後2010年5月304羽、2011年5月315羽、2012年5月303羽、2013年4月419羽、2014年5月289羽と激減はしていない。しかしこの間に港区稲永町や南陽町のコロニーが水没等で大打撃を受けた後、繁殖は厳しい状況になっている。この鳥の減少は繁殖地となる砂礫地の縮小・消滅が最大の理由であるが、さらにはカラスによる卵やひなの食害が近年国内各地で深刻化している。

【保全上の留意点】

採餌場や餌となる小魚の量等は現在問題ないと考えられるが、集団営巣に適する広い砂礫地は近年急速に減少している。どこかに恒久的な営巣地を確保することが望ましい上、カラス対策も重要な課題である。

【特記事項】

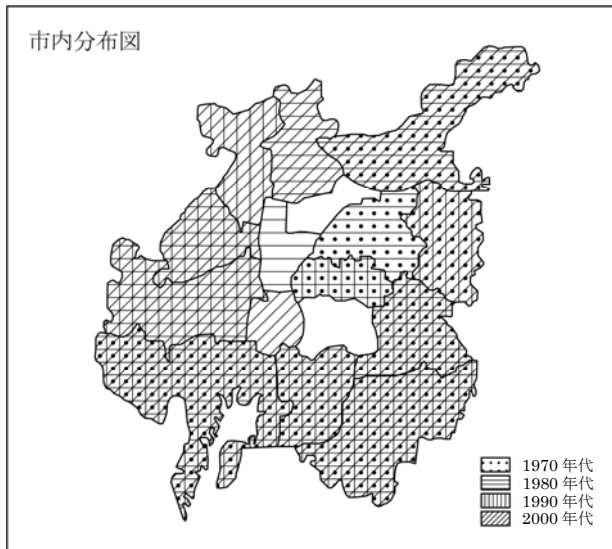
首都圏では近年、ビルの屋上への誘致に成功している例もある。

【関連文献】

愛知 83:136, 愛知 95:78, 愛知 02:136, 愛知 06:79, 愛知 09:163, 繁殖 78:182, 分布 88:203, HB4:120, HBW3:657, CBW1:464.



コアジサシ (夏羽)
港区天白川河口、2011年5月20日、森井豊久 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <タカ目 タカ科>

ハチクマ *Pernis ptilorhynchus* (Temminck)

カテゴリー

名古屋市2015		絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【選定理由】

名古屋市は主に秋（9～10月）の渡りの通過点だが、市内東部にはわずかに繁殖環境も残っている。全国的に数が減っていると考えられる種なので、保全対策を積極的に考えていく必要がある。

【形態】

全長雄約57cm、雌約61cm。トビよりやや小型で、頭部が細く見えるのが特徴。色彩は淡色型から暗色型まで変化に富む。飛翔時、雄では翼と尾に太い横縞模様が目立つが、雌や若鳥にも雄ほどには目立たない細い横縞模様がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

おもに東部で秋の渡り期に観察されるが、1994年には猪高緑地で繁殖が確認された。

【県内の分布】

秋の渡り期に各地で観察され、特に渥美半島での渡りは有名。茶臼山等での繁殖記録もある。

【国内の分布】

夏鳥として5～10月頃滞在し、主要四島および佐渡で繁殖する。

【世界の分布】

アジア中・東部の中緯度域で繁殖し、南～東南アジアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

低山、丘陵地のアカマツや広葉樹の林に生息し、樹上に営巣する。クロスズメバチやアシナガバチ類を主食とするため、採餌も林内で行うことが多いが、林縁部でカエル、ヘビなどを捕食することもある。ナラ類やアカマツの樹上に巣を作り、6月頃、通常2卵を産んで繁殖する。飛翔中、両翼を背の上で打ち合わせるような独特な求愛行動をする。鳴き声はピーウー、ピーウーと鳴くほか、ター、ターとコジュケイに似た声も出す。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部での記録が主だが、守山区の東谷山、小幡緑地や名東区の猪高緑地ではほぼ毎年9～10月に観察されているほか、上記のように稀な繁殖記録もある。山林の伐採などによる生息環境の悪化が全国的な本種減少の原因と推測される。

【保全上の留意点】

オオタカに比べて、繁殖を含む生息状況に不明の点が多い。名古屋市は主として渡りの通過点であるが、今後生息状況をより正確に把握して、繁殖環境をも保全・創出することが望まれる。

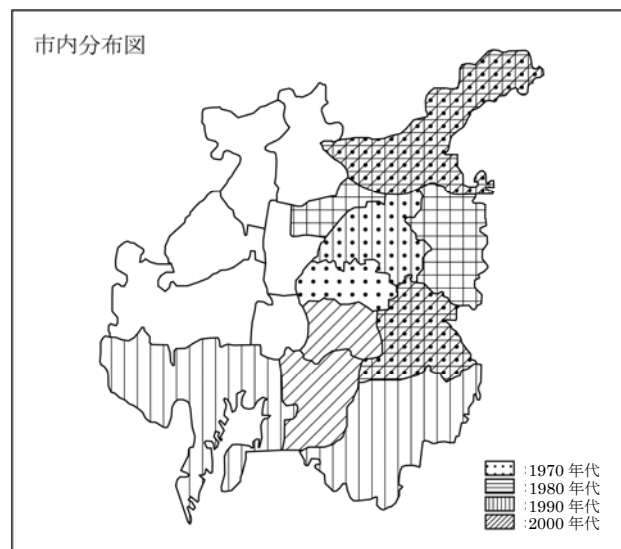
【関連文献】

愛知 83:61, 愛知 95:35, 愛知 02:96, 愛知 06:34, 愛知 09:121, HBE2:13, HBW2:111, CBW1:520.

(執筆者 小笠原昭夫)



ハチクマ
知多郡美浜町富具崎、2014年10月7日、森井俊雄 撮影



鳥類 <タカ目 タカ科>

チュウヒ *Circus spilonotus* Kaup

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類	
愛知県	繁殖	絶滅危惧ⅠA類
2015	越冬	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類	

【選定理由】

冬鳥として少数定着しているが、広いアシ原という特殊な環境に適応しきった種類であるため、アシ原の開発を伴う近代化の波の前に存続が危ぶまれる状況にある。日本での繁殖地は北部（北海道、南千島、青森県、秋田県）以外では石川県、伊勢湾岸北部ほか数ヶ所に限られており、繁殖分布の特殊さから見ても当地の個体群は注目に値する。

【形態】

全長雄約48cm、雌約58cm。トビよりやや小さいタカで、雄には色の変異が多く、頭～背は灰色、黒色、灰褐色等。腰が白く、中央の尾羽は灰色。下面には白地に暗褐色の縦斑があり、翼の下面は白っぽい。雌は頭部が淡褐色、体の上面は褐色、下面は茶褐色のものが多い。若鳥は上下面とも黒褐色で下面に縦縞があり、翼には横縞があるが、やはり変異が多い。滑翔時、両翼を扁平V字形に保つ。



チュウヒ
港区南陽町、2010年4月8日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

主に南西部で記録されている。

【県内の分布】

アシ原のある川の下流部や沿岸部に主に冬鳥として渡来するほか、伊勢湾奥部のアシ原では少数が繁殖している。

【国内の分布】

北海道、南千島、東北地方北部で夏鳥として繁殖し、本州以南や洋上の島々では主として冬鳥（石川県、滋賀県、愛知県、三重県及び四国東北部、九州東北部には少数留鳥もいる）。

【世界の分布】

アジア東部の中緯度域、ニューギニア等で繁殖し、北方産のものは温帯～熱帯へ南下して越冬する。世界での個体数に関する情報は少ないが、特に減少してはいない模様。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部のアシ原（営巣地、ねぐら）と周辺に農地（餌場）のある環境に生息し、ネズミ、小型～中型の鳥類、魚類等を捕食する。

4～7月頃、アシ原の地面にアシやスキの茎を積み重ねて巣を作り、5～7卵を産んで繁殖する。アシ原上を低く飛び、時どき停空飛翔して餌動物を狙う。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内での分布の中心は庄内川、新川、日光川の下流部～河口部一帯。2003年には庄内川河口近くで2番（つがい）が営巣していたが、河川環境の変化と、心ない人間の執拗な接近などの影響もあって、繁殖期には見られなくなり、以後の記録は下記のように非繁殖期中心となった。2004年12月4羽、2005年3月4羽、2006年2月3羽、2007年2月2羽、2013年12月4羽、2014年2月4羽。

【保全上の留意点】

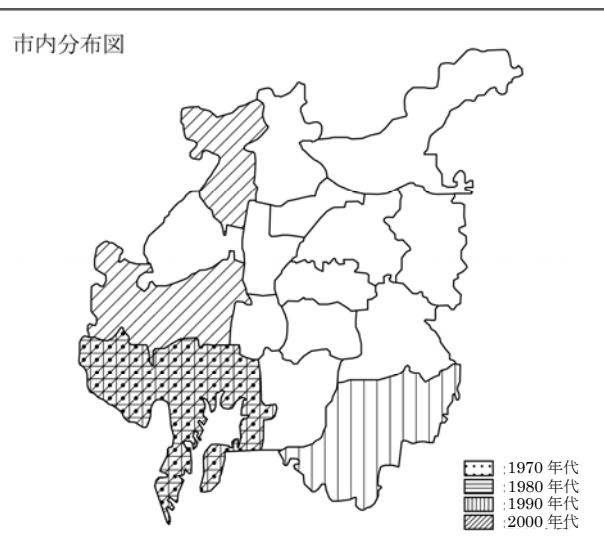
かつて冬鳥であった本種が一旦繁殖種となり、再び冬鳥に戻ってしまった。アシ原の保全とともに、繁殖期の不用意な人間の接近を排除しなければならない。

【特記事項】

アジア中部以西、ヨーロッパ、アフリカに分布するヨーロッパチュウヒ (*C. aeruginosus*) を同種と見なす説もある。

【関連文献】

愛知 83:71, 愛知 95:41, 愛知 02:86, 愛知 06:40, 愛知 09:109, 分布 88:118, HBE2:105, HBW2:137, CBW1:536.



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <タカ目 タカ科>

サシバ *Butastur indicus* (Gmelin)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県	繁殖
2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつては都市周辺でも普通に繁殖していたが、近年減少傾向が目立つ。水田脇の山林などに営巣し、カエルやヘビを捕食していた生活様式が、田畑の減少とともに維持されにくくなったためかと考えられる。

【形態】

全長 47～51cm。背面は褐色。成鳥の腹面には白地に褐色の横縞（若鳥は褐色の縦縞）模様がある。ほおは灰色でその上に白い眉線がある。のどは中央が縦に黒く、左右は白い。尾は灰褐色で数本の黒帯がある。脚は黄色。

【分布の概要】

【市内の分布】

主に周辺部（特に東部）で春と秋に記録されているが、数は多くない。

【県内の分布】

ほぼ全県下に記録があり、低地～低山で繁殖記録も多かったが、近年減少の傾向にある。

【国内の分布】

北海道と東北地方北部を除くほぼ全国に夏鳥として渡来し、本州、佐渡、隠岐、四国、九州、伊豆諸島では繁殖している。奄美以南では越冬するものもいる。

【世界の分布】

日本の他、中国東北部、アムール南部、ウズベキスタン、北朝鮮などで繁殖し、中国東南部、台湾、インドシナ半島、マレーシア、フィリピン、インドネシアなどへ渡って越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

3月下旬～5月頃渡来し、低地～低山地のアカマツ林や雑木林で繁殖する。林縁部や水田でカエル、ヘビ、昆虫などを捕食する。9月下旬～10月中旬頃、南方（当地方では西方）への渡りの最盛期を迎え、渥美半島での大群の渡りが有名だが、市内でも少数の移動を見ることがある。繁殖期にピクイーまたはキンミーと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市は元来通過地点だが（繁殖情報もある）、近年見る機会が漸減している。近郊の農地（特にサシバが好む谷戸）の休耕田化が進み、餌生物が少なくなったためではないかと指摘されている。

【保全上の留意点】

1970年代頃、農薬の大量使用による餌生物の減少があったが、現在は上述のように、全く別の原因で、地域的に田畑の動物が減少している。日本の産業構造が以前と変わり、容易に復活できる状態ではないが、市内のごく一部にでも里山の原風景ともいえる谷戸の水田を復活させることが、本種の減少に歯止めをかける有力な手段であると考えられる。

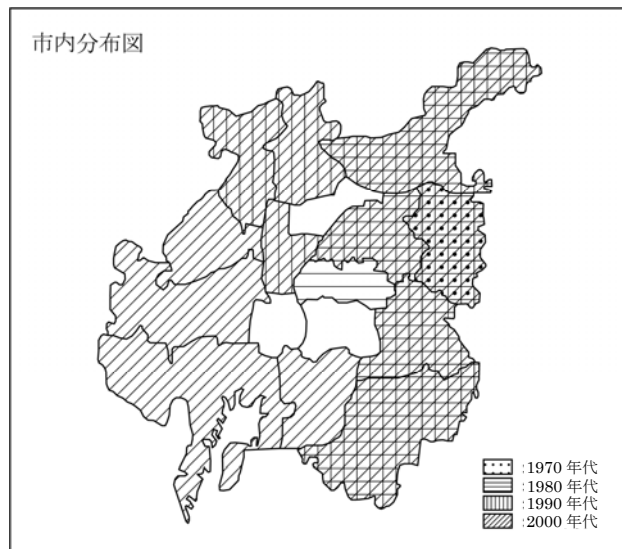
【関連文献】

愛知 83:68, 愛知 95:39, 愛知 02:97, 愛知 06:38, 愛知 09:122, 繁殖 80:122, HBW2:167, CBW1:548.

(執筆者 小笠原昭夫)



サシバ
緑区勅使ヶ池、2013年8月22日、佐藤武男 撮影



鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles)

【選定理由】

かつて市内でも寺社林等で普通に繁殖していたが、現在繁殖記録は激減している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	繁殖 通過 絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	準絶滅危惧 リスト外

【形態】

全長 27～31cm。頭部～体の上面は黒褐色で尾には黒帯がある。体の下面は白地に黒褐色の縦斑がある。翼の下面は白と暗褐色の横縞模様。ズクと名が付くが頭上に羽角はなく、尾は長く脚も長めで、顔に目立つ顔盤がないのでフクロウ類にしてはタカに似た体形といえる。目は黄色、嘴は黒、脚指には羽毛が無く黄色。



アオバズク
千種区東山公園、2010年6月25日、矢田和子 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

主に初夏と秋、老木の多い地域で観察されている。

【県内の分布】

低地～山地の森で観察され、各地で繁殖もしている。

【国内の分布】

ほぼ全国に夏鳥として渡来し、離島以外のほとんどの地域で繁殖しているが、本州北部と北海道では少ない。

【世界の分布】

アジア南部～東部、東南アジアの島々で繁殖し、北のものは南へ渡って越冬する。世界で特に減少しているとの報告はない。

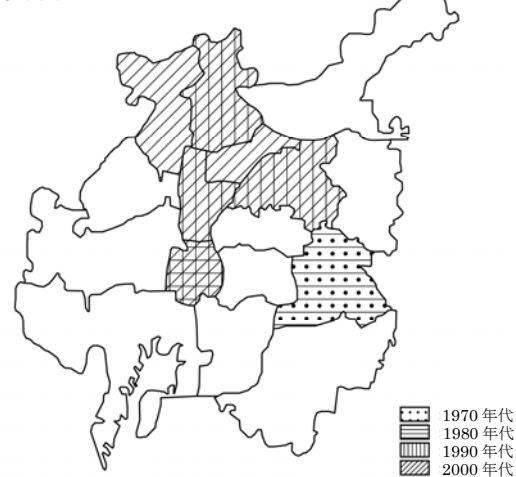
【生息地の環境／生態的特性】

4月下旬から10月末頃にかけて低地～低山の森に渡来し、森の中や林縁部などで夜間ヤマユガ、タガメ、シオカラトンボ、トノサマバッタ、ミンミンゼミ等比較的大型の昆虫を捕食して生活する。小鳥やコウモリを捕ることもある。5～7月頃、老木の樹洞に産卵して繁殖する。巣箱を利用することもある。ホッホ、ホッホと高い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

熱田神宮、名古屋城、東山公園等老木がある地域に渡来しているが、近年繁殖記録があるのは熱田区高座結御子神社（1989）、東山公園付近等数ヶ所だけで、市内各地で繁殖していた1960年代とは隔世の感がある（2003年7月南区星崎町で1羽、2004年5月庄内川河口部で1羽などの散発的な観察記録はある）。繁殖が激減した主な原因は、大木の伐採による営巣場所の消失と、主食とする大型昆虫の減少だと考えられる。本種はフクロウ科の中では比較的人家の近くや都会でも繁殖できる鳥である。

市内分布図



【保全上の留意点】

緑地の積極的な造成・保全を図ると共に、巣箱をかけて樹洞の不足を補うことも、有効な手段の一つと考えられる。

【関連文献】

愛知 83:147, 愛知 95:84, 愛知 02:138, 愛知 06:85, 愛知 09:166, 繁殖 78:216, 分布 88:222, HBW5:233, CBW1:480.

（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <ハヤブサ目 ハヤブサ科>

ハヤブサ *Falco peregrinus* Tunstall

【選定理由】

市内各地で少数が観察されている。近年、市の南西部では秋・冬だけでなく繁殖期にも散見されるようになったが、まだ安定した個体群とは言い難い。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県 2015	繁殖 越冬 絶滅危惧Ⅱ類 準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長雄約42cm、雌約49cm。翼端が尖っている。雌雄同色で、成鳥は上面青黒色。下面は白地に黒く細かい横縞がある。若鳥は上面暗褐色、下面は淡褐色地に暗褐色の縦縞がある。成・幼鳥とも両ほおに目の下から連なるひげ状の斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部で冬期を中心に多く観察されるほか、北部でおもに春・秋の移動期に観察される。

【県内の分布】

海岸、池沼、河川周辺等の開けた土地に冬期の記録があり、三河湾北岸で1996年県内初繁殖が確認された。

【国内の分布】

北海道、本州、佐渡、九州等の主として海岸沿いで繁殖し、冬期の記録はほぼ全国に広がっている。

【世界の分布】

ニュージーランドと南極大陸を除くほとんど全世界に生息し、繁殖している。世界では個体数はほぼ安定と推測されている。

【生息地の環境／生態的特性】

国内では特に北海道や東北地方の沿岸部に多く、地上性天敵が近寄れない岩場で繁殖する。多くは留鳥だが、北海道東北部や本州の内陸部で繁殖するものは冬期暖地へ移動する。ヒヨドリ等中型以上の鳥を主に、ウサギやネズミを狙うこともあり、相手が鳥の場合は空中で体当たりして蹴り落とす攻撃法をとる。キッキキッとかケーケーと聞こえる鋭い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市へは旅鳥または冬鳥として渡来し、藤前干潟周辺では見る機会が多いが、近年、冬期以外にも観察されるようになった。営巣の記録はないものの、2003年5月には繁殖行動の兆しも認められた。2007年3月～4月西区牛島町ルーセントタワービルで1羽(3月30日以降は2羽)が観察された。

【保全上の留意点】

近年各地で本種がビルに営巣する例が増えてきたので、藤前干潟に近い建築物でも営巣が始まる可能性がある。その際繁殖の妨害になるような人の干渉を減らす配慮が必要である。

【特記事項】

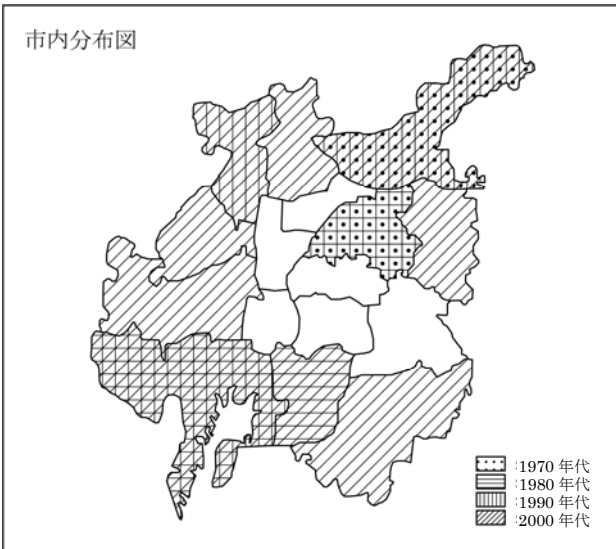
1960年代生物濃縮による DDT の体内蓄積が原因でアメリカ合衆国を中心にカシヨクペリカン (*Pelecanus occidentalis*)、ハクトウワシ (*Haliaeetus leucocephalus*)、ハヤブサ等での顕著な卵殻薄化が見られたが、日本では DDT の使用量が少なかったためか、類似の現象は認められていない。

【関連文献】

愛知 83:72, 愛知 95:41, 愛知 02:87, 愛知 06:40, 愛知 09:110, 分布 88:120, HBE2:361, HBW2:274, CBW1:698.



ハヤブサ
海部郡飛島村飛島干潟、2014年4月15日、森井豊久 撮影



鳥類

(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <スズメ目 ツバメ科>

コシアカツバメ *Hirundo daurica* Laxmann

【選定理由】

ツバメに比べて繁殖地の分布に偏りがある種類だが、近年都市部での減少が著しい。安定して採餌・営巣できる環境を確保する必要がある。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 17~20cm。上面は藍色光沢のある黒で、腰は赤褐色。目の後ろから頭側にかけても赤褐色。下面は淡褐色で、黒褐色の細い縦斑がある。尾は中央が深く切れこんだ燕尾でツバメより長め。

【分布の概要】

【市内の分布】

記録は南西部に少なく、中心部から東部、北部へ向かってやや多くなる。

【県内の分布】

低地~山裾に渡来するが、分布には偏りがある。

【国内の分布】

主要四島のほか佐渡や隠岐、対馬へ夏鳥として渡来するが、東北地方以北では少ない。九州では越冬するものもいる。

【世界の分布】

ユーラシア南部~ウスリー地方と熱帯アフリカで繁殖し、ヨーロッパのものは熱帯アフリカへ、アジアのものは中国南部~インド方面へ渡って冬を越す。

【生息地の環境/生態的特性】

夏期、低地~山地の村落や市街地に渡来する。カメムシ、ハムシ、カ、ハエ等の昆虫類を空中で捕食する。羽ばたきと滑翔を交えて直線的に飛ぶが、ツバメより滑翔が多く、羽ばたきはやや緩慢。5~7月、建物の水平な庇の下面に泥で徳利形の巣を作り、4~5卵を産んで繁殖する。チュリー、チュリー、ジルジルと、声はツバメに似るが少し濁って聞こえる。

【現在の生息状況/減少の要因】

1960年代までは名古屋駅前や栄周辺のビルなど市内各地に営巣していたが、その後まもなく都市中心部から姿を消し、市の辺縁部でも営巣は少なくなった。最近の市内での記録は繁殖より通過時のものに偏ってきている。都会では餌や巣材の泥が得にくくなったことが、減少の主要因と考えられる。

【保全上の留意点】

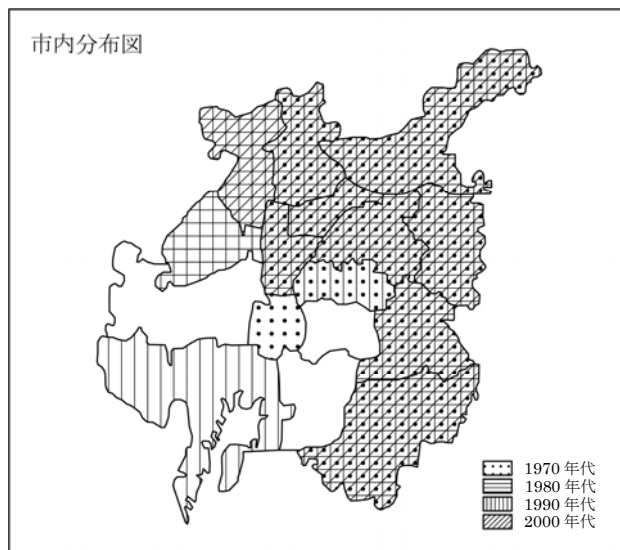
市街地では今後、餌も巣材も得やすくなることは予想されない。郊外で営巣場所となる水平な軒下をもつ建築物が減らないことが期待される。

【関連文献】

愛知 83:165, 愛知 95:94, 愛知 06:94, 繁殖 78:258, 分布 88:240, HBE5:278, HBW9:677.



コシアカツバメ
名東区牧野池、2013年7月26日、矢田和子 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <スズメ目 アトリ科>

コイカル *Eophona migratoria* Hartert

カテゴリー

【選定理由】

かつて稀だった本種は市内で一度増えて、また減少している。個体数増減の原因は明らかではないが、現在の不安定な状況からは衰亡の危険性も拭いきれない。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

全長約 18.5cm。雄は頭が黒く、首～背は灰褐色。腰は灰白色で尾は黒い。翼は青色光沢のある黒で、風切羽、初列両覆の先端が白い。胸～腹は淡褐色で脇は赤褐色。太い嘴は橙黄色だが、繁殖期には緑や基部が青黒色になる。雌は頭部・胴ともに灰褐色で、脇の赤褐色は雄より淡く、中央の尾羽は灰褐色（他の尾羽は黒い）。尾は長めで先端は凹形。近似種イカルの体は褐色味の少ない灰色で、頭の黒（雌、雄とも）がほおまで届かず、嘴は黄色。

【分布の概要】

【市内の分布】

主に冬鳥として市の中心部や北部を訪れるが西区には周年生息した記録もある。

【県内の分布】

低地～低山の限られた地域に毎冬訪れる傾向がある。

【国内の分布】

北海道、伊豆諸島、小笠原諸島を除くほぼ全域に冬鳥として訪れるが、全般に数は少なく、北・東日本ではさらに少ない（熊本県、島根県には繁殖記録がある）。

【世界の分布】

揚子江沿岸、中国東北部、朝鮮半島等で繁殖し、日本以外では中国南部、台湾等で越冬する。世界での個体数増減の情報はない。

【生息地の環境／生態的特性】

主に冬鳥として渡来し、低地～山地の落葉広葉樹林に群棲して、ムク、エノキ、センダン、イヌシデ等の木の実を好んで食べる。イカルの群れに混じることもある。囀り（さえずり）はキョキーコキーコーキキョーとイカルに似るが、イカルと違って声に濁りが入る。地鳴きはキュッキュと聞こえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では主として冬期、鶴舞公園、名古屋城、庄内緑地、東谷山で記録されている。庄内緑地では1994年～1999年の間、周年観察され、春、囀り（さえずり）も聞かれたが、その後繁殖期には見られなくなり、冬期の個体数も減った。1970年頃まではほとんどいなかったものが一旦増え、現在また減っている理由は解っていない。

【保全上の留意点】

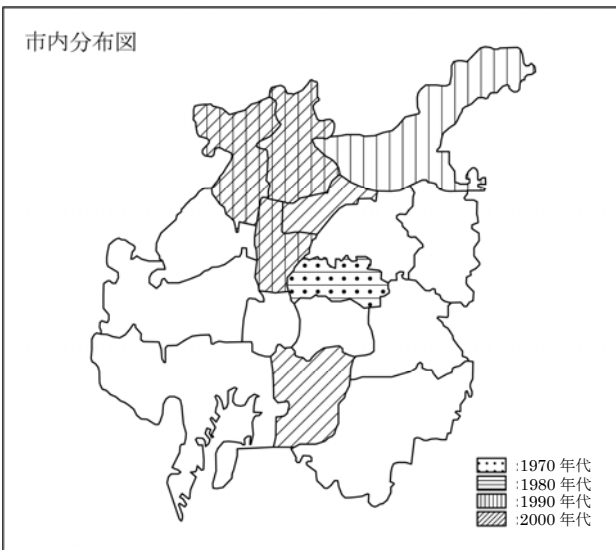
当面は増減の実態を把握し、その原因を究明することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:231, 愛知 95:129, 愛知 06:133, 分布 88:321, HBE8:832, HBW15:613.



コイカル
西区庄内緑地、1994年1月4日、森井豊久 撮影



鳥類

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ペリカン目 サギ科>

チュウサギ *Egretta intermedia* (Wagler)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖 通過 国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

3種の白サギの中では国内で最も減少が目立つ種類とされ、さらに、市内でも比較的広く見られるが、過去30年くらいの間に個体数は減少している。

【形態】

全長 63~72cm。頭から尾まで全身白色で脚は黒い。嘴は白サギ3種中最短で、夏黒く、冬黄色（先端のみ黒い）。目先は黄色く、夏には胸と背に長い飾羽を生じる。

【分布の概要】

【市内の分布】

比較的広く記録されているが、1980年代以後減少している。

【県内の分布】

平野部で広く記録され、そのうちいくつかの地域では他のサギ類とともに繁殖している。

【国内の分布】

夏鳥として東北地方南部以南で繁殖する。関東以西では越冬するものもある。1960年代以降減少傾向が続いている。

【世界の分布】

旧世界の熱帯~温帯に広く分布する。世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境/生態的特性】

低地の水辺やそれに続く草地に生息し、魚類のほかカエル、トカゲ、ザリガニ、昆虫類等を捕食する。干潟など海へ出ることは少ない。

飛翔時、休息時には首をS字形に縮めている。4~8月頃、他のサギ類（ダイサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギに、アオサギが加わることがある）と集団で林の樹上に巣を作り、3~5個の卵を産んで繁殖する。しわがれた声でグァー（グェーとも聞こえる）と鳴く。

【現在の生息状況/減少の要因】

主に守山区、名東区、天白区、緑区、南区、港区など市の周辺部で観察される。港区藤高で2010年9月に200羽観測されたのが近年の目立つ記録だが、ダイサギ・コサギと違って干潟へはほとんど出ない種類なので、内陸の淡水性湿地が減少した市内では衰退が著しい（市の西に隣接する東名阪蟹江IC、弥富ICの小規模な林へは、周辺の農地で昼間採餌した本種が1000羽以上集まって、他のサギ類とともに就峙している）。

【保全上の留意点】

他の白サギ類に比べて国内で減少が著しいとされる理由は不明だが、餌場と餌量（本種では特に淡水産の小動物）の確保、および安定して営巣が続けられる環境の確保が必要と考えられる。渡り鳥なので、保全には越冬地の生息状況も考慮する必要がある。

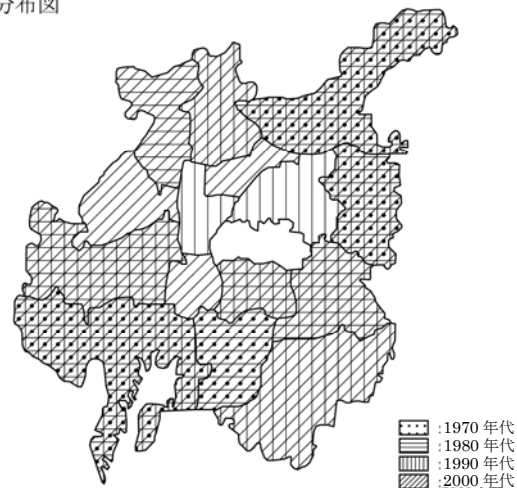
【関連文献】

愛知 83:33, 愛知 95:21, 愛知 06:16, 繁殖 78:74, 分布 88:58, HBE1:296, HBW1:410.



チュウサギ
港区藤高、2014年4月16日、森井豊久 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <ツル目 クイナ>

クイナ *Rallus aquaticus* Linnaeus

【選定理由】

かつては市内の水田や池沼の岸边に、相当数生息していたと考えられるが、近年見る機会が稀になった。市街化に伴う水辺植生の激減は、本種の生存を厳しくしている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 27～31cm。尾が短く脚は長い。上面は暗褐色で黒い縦斑があり、下面は顔～胸が青みを帯びた灰色、脇腹に白と黒の横斑がある。長めの嘴は春夏にはほぼ赤く、秋冬には下嘴基部が赤いほか黒褐色。脚は黄褐色。飛んだ時、翼に模様は出ない。



クイナ
港区戸田川、2014年3月12日、前田 崇 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

冬期、北部・東部・南部で記録されているが数は少ない。

【県内の分布】

平野部に広く分布しているが、数は多くない。一般に冬鳥だが、1975年、犬山市で巣と卵が発見された。

【国内の分布】

北海道と本州北部等で少数が繁殖するほか、本州以南に冬鳥として渡来する。

【世界の分布】

ユーラシアの中緯度域とアフリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ東部以東のものは南下して越冬する。世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

北海道では夏鳥、本州以南ではおもに冬鳥として、平地～山麓の水田、池沼、河川の岸边等の草の生えた湿地（淡水域ばかりでなく汽水域にも）に生息する。昆虫類、甲殻類、魚類、両生類などの動物質のほか、イネ科やタデ科の草の種子等植物質も食べる。通常草蔭を歩行移動し、長く高く飛ぶことはほとんどない。6～7月頃ヨシ等の根元に草の茎や葉を積んで皿形の巣を作り、6～8卵を産んで繁殖する。キュイキュイと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市の北部、東部および南部で少数記録されている。水田やため池、河川の草つきの湿地が本種の生息環境なので、それらの減少が本種の生息を制限していると考えられる。

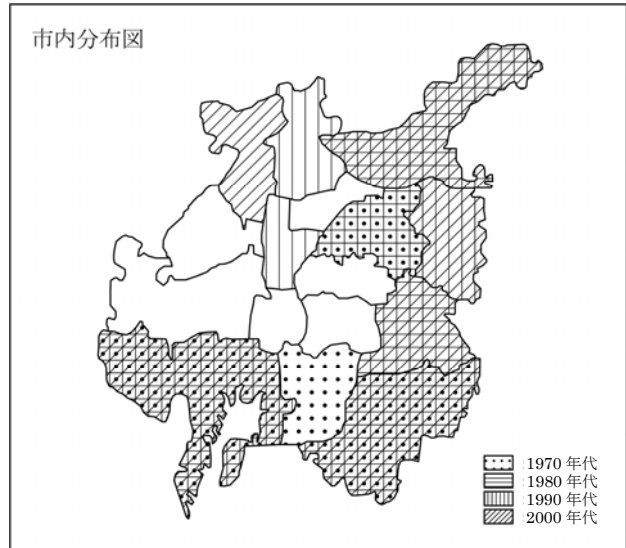
【保全上の留意点】

生息季節の別はあるが、ヒクイナの場合と同様、湿地の保全が望まれる。コンクリート護岸は治水を妨げない範囲で最小限に止めることが望ましい。

【関連文献】

愛知 83:80, 愛知 95:45, 愛知 02:125, 愛知 06:45, 愛知 09:149, 繁殖 78:140, 分布 88:135, HBE2:537, HBW3:169, CBW1:340.

(執筆者 小笠原昭夫)



鳥類

鳥類 <カッコウ目 カッコウ科>

カッコウ *Cuculus canorus* Linnaeus

【選定理由】

地図上では特に顕著な減少傾向は認められないが、2000年頃までであった繁殖期間中の連続滞在記録が途絶えた。

カテゴリー

名古屋市2015	繁殖	準絶滅危惧
愛知県2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014		リスト外

【形態】

全長 32~37cm。頭部~上胸部と背は青灰色、長めの尾は灰黒色で横縞状に多数の白点がある。下胸部と腹は白く、灰黒色の細かい横縞があり(ツツドリ、ホトトギスより細く密)、飛翔中の翼(先が尖る)下面にも横縞が見える。目は黄色。若鳥は頭部~上面茶褐色気味で後頭部に白斑があり、ほぼ全身に黒い横縞がある。雌には稀に赤色型がいる。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内では5、6月頃東部を中心に中部、北部にも記録があり、東部では近年まで繁殖期を通しての記録もあった。

【県内の分布】

平野部から山地にかけて各地で観察され、三河山地では繁殖の記録もある。

【国内の分布】

ほぼ全域に夏鳥または旅鳥として渡来し、主要四島と南千島、佐渡、対馬では繁殖している。

【世界の分布】

極北部とインド等を除くユーラシアほぼ全域及びアフリカ北部で繁殖し、アジアのものはインド~ニューギニアで越冬する。ヨーロッパ西部では20世紀に入ってから減少したとされるが、世界的には特に減少の情報はない。

【生息地の環境/生態的特性】

繁殖期には林縁部や林に接する草原に生息し、5月下旬~8月上旬頃モズ、オオヨシキリ等の巣に托卵して繁殖する。渡り期には公園や堤防上のサクラ並木等でおもに蛾の幼虫を捕食しながら移動していく。雄はカッコウ、カッコウと鳴き、雌はピピピピピ・・・と鳴く。飛翔中にも鳴くが、ホトトギス、ジュウイチと異なり、日没後は鳴かない。

【現在の生息状況/減少の要因】

市内各地で比較的多く記録されている。記録の多くは5~6月または9~10月の渡り期のものだが、守山区と天白区では2000年頃まで夏期を通して生息し、繁殖の可能性を感じさせた(卵、ひなは見つかっていない)。2010年以降、繁殖期中の記録はない。その理由は不明だが、宅地や道路の建設が生息地周辺の環境を悪化させた可能性が高い。

【保全上の留意点】

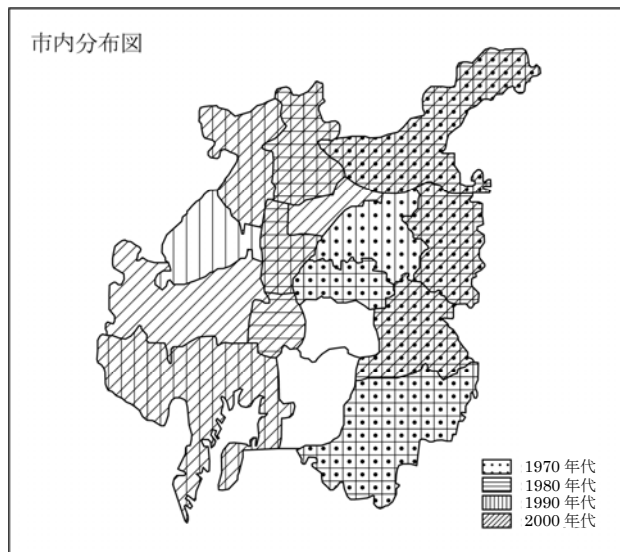
生息環境の保全が大切である。托卵性の鳥なので、仮親になりうる鳥(モズ、オオヨシキリ、ホオジロ、セグロセキレイ等)の動静にも注目する必要がある。

【関連文献】

愛知 83:148, 愛知 95:81, 愛知 06:82, 繁殖 78:204, HBE4:402, HBW4:554, CBW1:332.



カッコウ
北設楽郡茶臼山、2013年6月4日、森井豊久 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 チドリ科>

イカルチドリ *Charadrius placidus* Gray et Gray

カテゴリー

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖	絶滅危惧Ⅱ類
	越冬	準絶滅危惧
環境省2014		リスト外

【選定理由】

市内に広く生息しているが個体数は減少している。生息環境の縮小の他、繁殖の成否に関しては営巣する砂礫地の保全が関与している可能性が高い。

【形態】

全長19～21cm。背面は灰褐色で腹は白く、胸に黒帯がある。顔には額につながる黒く太い過眼線がある。嘴は黒く、脚は淡黄色。飛翔時、翼に淡色の線が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

市の中心部を除いて広く記録されてきたが、個体数は少ない。守山区では2004年まで続いていた繁殖が、2008年以降確認されていない。

【県内の分布】

三河地方の東北部を除くほぼ全域に留鳥として生息する。

【国内の分布】

ほぼ全国に留鳥として生息し、北海道と本州北部のものは南下して越冬する。

【世界の分布】

アジア大陸東部と日本で繁殖し、大陸のものは中国南部・インドシナ半島北部へ南下して越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

主として河川の上・中流域や湖畔に周年生息し、3月中旬～7月中旬に、河原の砂礫地や草の疎生する地面に産卵して繁殖する。ヒナは早成性で、孵化後まもなく歩き始める。抱卵中や孵化直後に、親鳥は接近する外敵に対して擬傷行動を示すことが多い。非繁殖期にはイネの刈跡など水辺から離れたところにも見られる。昆虫の成・幼虫を主食としている。ピョ ピョ ピョと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

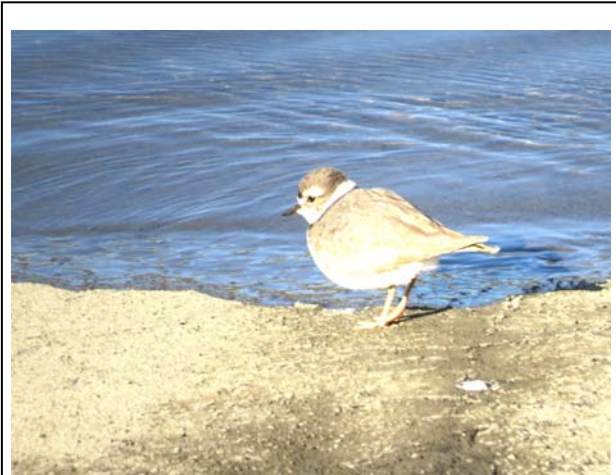
近年記録個体数が減少している。減少の主な原因は、おそらく開発や河川改修などによる生息環境の変化だと推測されるが、それとは別に、河原への頻繁な車の乗り入れによる繁殖妨害が増加しているのではないかと懸念される。

【保全上の留意点】

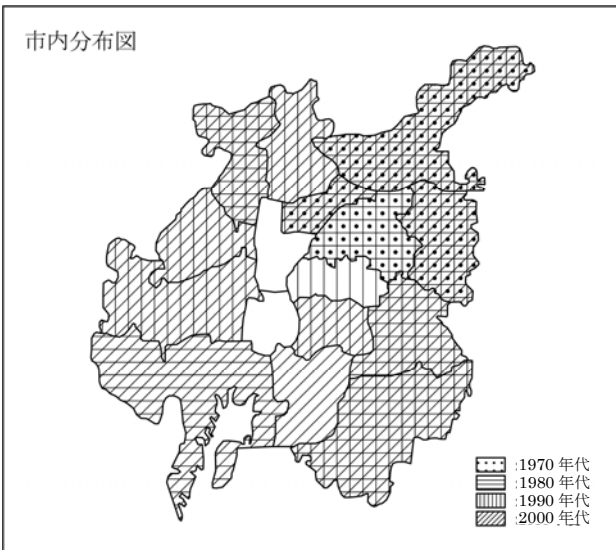
鳥たちの餌場やねぐらを奪う開発・土木工事のあり方を検討し、より環境保全に配慮する姿勢と方法を確立することが必要。さらに海浜のウミガメを守るのと同じ感覚で、繁殖地のある中流域の河川敷への車の乗り入れ規制を行うことも必要と考えられる。

【関連文献】

愛知 83:88, 愛知 95:49, 愛知 06:49, 愛知 09:126, 繁殖 80:154, HBW3:426, CBW1:424.



イカルチドリ
港区大江川河口、2014年12月19日、芝原隆男 撮影



鳥類

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 チドリ科>

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Linnaeus

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県	繁殖
2015	越冬
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市では、繁殖地としてよりは秋冬の採餌地としてより多く記録されてきた。従来数多く生息していた水辺性鳥類の中で、減少が目立つ種類の一つである。今後の急激な衰亡も懸念されるが、現在まだそれなりの数が見られることを考慮し準絶滅危惧と評価した。

【形態】

全長 17～19cm。上面は灰褐色で、下面は白色。雄の夏羽では過眼線と胸側の斑が黒く、冬羽や雌ではこれらが褐色。雄の夏羽の頭頂は橙褐色だが、これも冬羽と雌では灰褐色と地味な色合い。飛ぶと翼に白い線が出る。嘴と脚は黒い。

【分布の概要】

【市内の分布】

南部と北部の水辺に生息している。

【県内の分布】

平野部。特に海沿いに周年広く生息している。

【国内の分布】

ほぼ全国に分布し、繁殖するが、北海道、南千島では夏鳥、本州以南で留鳥。

【世界の分布】

北半球の低緯度から中緯度域で繁殖し、熱帯、亜熱帯、暖帯で越冬するものが多い。世界的に個体数は多いが、ヨーロッパやアメリカでは減少している。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河川の下流部に生息し、昆虫類、クモ類、ゴカイ、トビムシ、小貝等、主に動物質を食べている。砂浜や河岸の砂礫地を少しくぼめて目立たぬ巣を作り、通常3卵（時に4卵）を産んで繁殖する。卵の孵化前後に外敵が近づくと、親鳥は翼を傷めたような動作（＝擬傷）をする習性がある。ピルッ、ピルッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市の南部と北部に分布するが、分布の中心である庄内川河口付近で記録された数は、1975年9月2,280羽、1979年9月1,210羽、1980年9月955羽、1998年10月354羽、2000年10月110羽、2002年11月146羽、2004年11月310羽、2005年2月192羽、2007年10月155羽、2008年11月137羽、2010年1月205羽、2012年12月171羽、2014年1月98羽と顕著に減少している。市外で繁殖して秋冬に訪れるものが元来多かったが、名古屋市周辺での砂浜の減少と一時的に砂地だった造成地の状況変化により、繁殖適地が激減したことが市内での減少の原因の一つと考えられる。

【保全上の留意点】

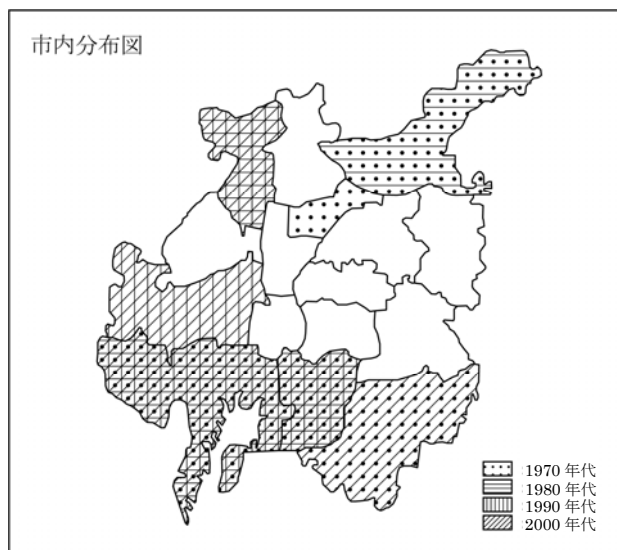
採餌地としての干潟の保全のほか、恒久的な繁殖地としての砂礫地を保全（造成を含む）することが必要である（コアジサシについても同じことが言える）。

【関連文献】

愛知 83:87, 愛知 95:50, 愛知 06:49, 愛知 09:150, 繁殖 78:156, 分布 88:148, HBE3:153, HBW3:432, CBW1:426.



シロチドリ（冬羽）
港区日光川河口、2010年10月10日、森井豊久 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 チドリ科>

メダイチドリ *Charadrius mongolus* Pallas

カテゴリー

【選定理由】

春と秋、普通に訪れる旅鳥で、激減してはいないが、往時に比べて渡来数が減少している。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 18～21cm。背面は褐色で腹は白い。夏羽では過眼線が黒く、のどが白く、胸～頸側が赤褐色（雌はやや淡色）。冬羽では赤褐色が消える。若鳥は冬羽に似るが、背面に淡色の羽縁がある。嘴は黒く、脚は暗い緑褐色。飛行時、翼に白線が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

主として南部 3（港・南・緑）区に、旅鳥として渡来している。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、衣浦湾・三河湾沿岸部、知多半島、渥美半島などに旅鳥として渡来し、少数越冬するものがある。

【国内の分布】

ほぼ日本全土の沿岸域に旅鳥として渡来し、本州、九州、伊豆諸島、小笠原諸島、琉球諸島などでは越冬するものがある。

【世界の分布】

シベリア、カムチャツカ、中国東北部・西部などで繁殖し、アジア南部、台湾、フィリピン、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、アフリカ東部などの沿岸域で越冬する。世界的に特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期には高山のツンドラ・草原や、高緯度地方の低地の砂丘などに生息する。非繁殖期には海岸の干潟や砂洲に群生し、時に水田や池沼を訪れることもある。ゴカイ、二枚貝、カニ、昆虫などを捕食する。クリリリッと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1981年庄内川河口部で89羽、1983年天白川河口部で48羽、1992年藤前干潟で60羽、2005年5月港区稲永ふ頭で82羽などが記録されたが、以後は2007年4月19羽、2010年4月33羽、2013年4月6羽、2014年5月14羽（以上何れも庄内川河口部）と、それまでの数を超える記録はない。減少の直接原因は不明だが、他の多くのシギ・チドリ類の減少と同じく、生息環境の縮小・悪化が関係していると推測される。

【保全上の留意点】

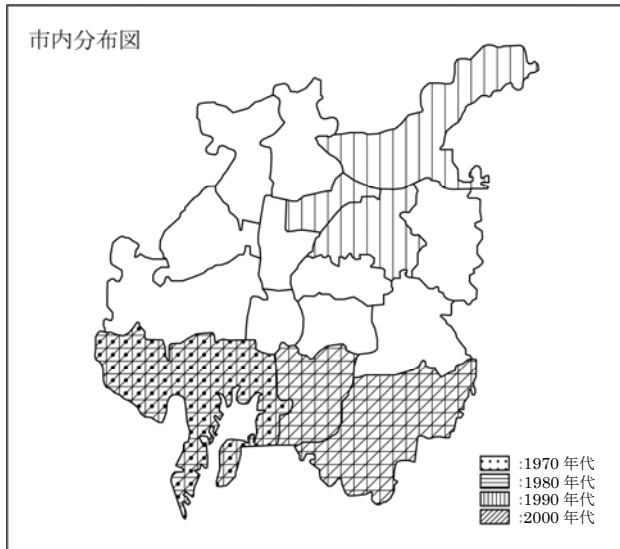
減少の原因は明確ではないが、干潟や湿地の保全が重要と考えられる。

【関連文献】

愛知 83:88, 愛知 95:50, 愛知 06:50, 分布 88:149, HBE3:166, HBW3:437, CBW1:428.



メダイチドリ（夏羽）
港区天白川河口、2011年4月30日、森井豊久 撮影



鳥類

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 セイタカシギ科>

セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus)

【選定理由】

1960年頃までは全国的に迷鳥に類別される程の稀種だったが、その後、愛知県や首都圏に定期的に出現するようになり、1975年以降県内および千葉県・東京都・大阪府でごく少数が繁殖している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県	繁殖
2015	越冬
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類
	準絶滅危惧

【形態】

全長約 32~40cm。黒い嘴はまっすぐで細長く、淡紅色の脚は非常に長い（体との比率上ここまで長い鳥は世界でもフラミンゴ以外にいない）。雄の上面は緑色光沢を帯びた黒で、下面は白い。雌の体の上面には雄より褐色味がある。頭部は頭上~後頭が黒いものから全体が白いものまで変異が多い。若鳥の上面は灰褐色、下面は白色。成鳥、若鳥とも腰と尾は白い。翼は長めで翼端は尖っている。



セイタカシギ
港区藤高、2009年4月29日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部に少数生息する。

【県内の分布】

海部郡鍋田地区、矢作川河口部、汐川干潟周辺等（いずれも繁殖記録あり）に生息するが数は少ない。

【国内の分布】

北海道~沖縄のほか小笠原諸島、硫黄列島、大東諸島等に飛石状に記録はあるが、数は少ない。

【世界の分布】

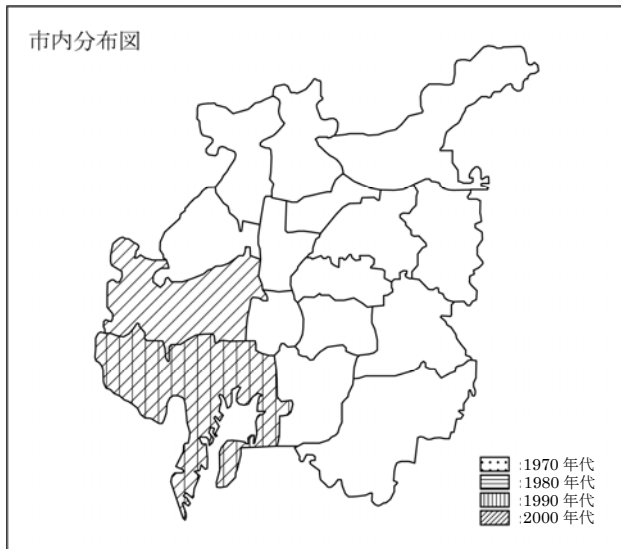
ユーラシア、アフリカ、南・北アメリカ、オーストラリア等に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸近い水田、池沼、埋立地等に生息し、脚の長さを活かして、かなり深くまで踏みこみ、水生昆虫、小貝、小魚、オタマジャクシ等の小動物を捕食する。地面を浅くくぼめて、ヨシの茎や貝等の巣材を敷いた上に、通常4個産卵して繁殖する。ピュイツ、ピュイツまたはキッキキッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

港区庄内川河口付近で秋~春に観察されている。近くの鍋田干拓地では繁殖の記録があるが、名古屋市内には繁殖記録はない。元来数の少ない鳥で、現在特に減少はしていないが、存続の基盤が安定しているとは言えない。通常は数羽の小群で観察されるが、個体数の多い記録としては、2009年4月20羽（港区藤高）がある。



【保全上の留意点】

名古屋市だけではなく、周辺部にかけて広い干潟の保全が必要である。

【関連文献】

愛知 83:124, 愛知 95:70, 愛知 02:107, 愛知 06:72, 愛知 09:133, 分布 88:189, HBE4:36, HBW3:345, CBW1:422.

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

ヤマシギ *Scolopax rusticola* Linnaeus

【選定理由】

夜行性で観察されにくい鳥であるが、往時に比べ近年確認例が減ってきている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 31～38cm。体の上面は赤褐色に黒と灰白色の細かな斑模様。頭上に赤褐色と黒の横縞がある。下面は淡褐色に黒褐色の細かな横縞模様。ハトより大きい太ったシギで、長さ約8cmのまっすぐな嘴と短い頸、脚をもつ。尾羽は基部が黒く先端部が灰色。飛ぶと翼端が丸い。



ヤマシギ
千種区平和公園、2008年10月22日、矢田和子 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

北部、東部、西部等、おもに周辺部に散発的な記録がある。

【県内の分布】

平野部に記録は散在している。

【国内の分布】

本州以北、北海道、伊豆諸島で繁殖し、本州中部以南で越冬するが、繁殖密度は北海道で最も高い。

【世界の分布】

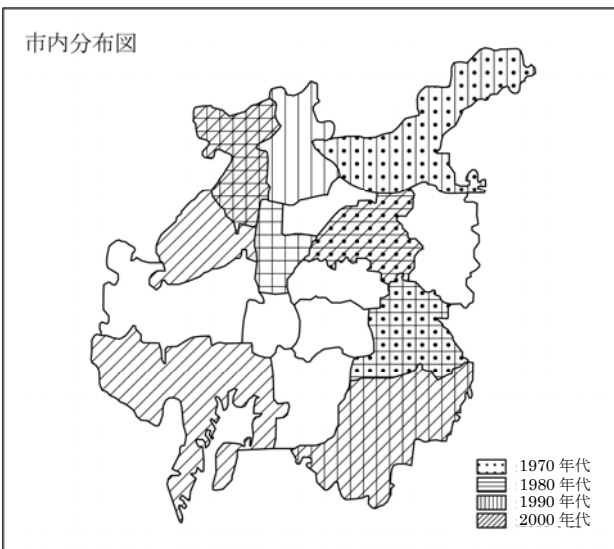
ヨーロッパからアジア東部の中高緯度域、ヒマラヤ、サハリン等で繁殖し、多くは南下してヨーロッパ南部、アフリカ北部～アジア東南部で越冬する。狩猟や生息環境の破壊により、世界各地で減少しているとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

低山の林内で繁殖するが、市内では（県内でも）繁殖の記録はない。名古屋市へは冬鳥として渡来し、夜間、林内や林縁で、土や堆肥の中からミミズをつつき出して食べるほか、昆虫類、多足類、甲殻類や植物の種子等も食べる。繁殖期の夕方、林の上を飛びながらチキッ、チキッと鳴くが、秋冬にはほとんど鳴かない。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市では10月～4月に記録されているが、夜行性で秋冬はほとんど鳴かないため、記録洩れもあると思われる。干潟や水田にすむ多くのシギ類と違って林内に生息する種類なので、宅地開発などで林が拓かれれば姿を消す。近年観察例は少なくなっているが、2003年秋には緑区と千種区で各1羽観察された。



【保全上の留意点】

雑木林と林縁部をより自然な姿で保全することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:121, 愛知 95:68, 愛知 02:150, 愛知 06:70, 愛知 09:161, 繁殖 78:166, 分布 88:183, HBW3:489, CBW1:442.

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類

鳥類 <チドリ目 シギ科>

オオソリハシシギ *Limosa lapponica* (Linnaeus)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

市の南西部を渡りの中継地として利用しているが、渡来数は年を追って減少しつつある。ただし、庄内川の河口部には現在まだそれなりの数が飛来しているため、準絶滅危惧と評価した。

【形態】

全長 36～44cm。夏羽は体の上下面とも赤褐色で、背には黒い小斑が散在する。腰は白く、尾は白地に黒褐色の細い縞模様がある。冬羽の上面は灰褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は淡い灰褐色で胸や脇に褐色の斑がある。

若鳥は冬羽に似るが、上面の斑の形に特徴がある。嘴は平均 10cm と長く、わずかに上に反っており、基部は肉色で先端部は黒い。脚は長いが体形が似てやや小型のオグロシギより短い。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部でのみ記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、三河湾北部・東部の干潟に渡来する。

【国内の分布】

ほぼ全国に旅鳥として渡来し、少数は越冬する。

【世界の分布】

スカンジナビア～シベリアの極北部、アラスカ西部等で繁殖し、ヨーロッパ中・南部、アフリカ～インド西部、東南アジア～オーストラリア、ニュージーランド等に渡って越冬する。世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

4～5月と7～10月頃渡来し、主に干潟でゴカイ、貝、小エビ、トビムシ、昆虫類等を捕食する（近縁のオグロシギのように水田に入ることほとんど無い）。春・秋の渡来数もオグロシギとは逆で、本種は春に多い。ケツケツと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1979年4月、庄内川河口付近で315羽が記録され、その後も300羽を超える記録はあったが漸減して、1998年春164羽、2003年春70羽になり、近年は2012年4月38羽、2013年4月81羽、2014年4月67羽と、1980年代の1/5～1/4に減少している。大型の鳥が必要とする広く安全性の高い湿地と、満潮時に休息できる後背地が周辺部から消えつつあることが、減少の要因ではないかと推測される。

【保全上の留意点】

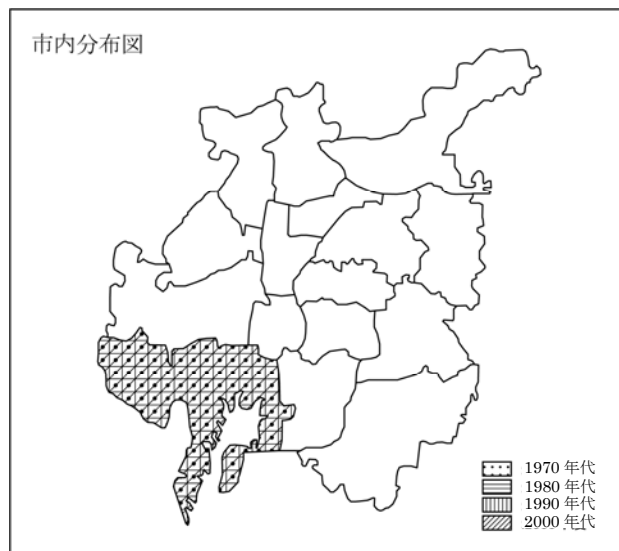
名古屋市だけでなく、周辺部にかけての広い干潟の保全が必要と考えられる。

【関連文献】

愛知 83:117, 愛知 95:66, 愛知 02:134, 愛知 06:67, 愛知 09:159, 分布 88:179, HBE3:473, HBW3:502, CBW1:436.



オオソリハシシギ (冬羽)
港区庄内川河口、2013年10月1日、森井豊久 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

ダイシャクシギ *Numenius arquata* (Linnaeus)

カテゴリー

【選定理由】

名古屋市南西部を渡りの中継地、越冬地として利用しているが、近年渡来数、越冬数ともに減少している。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

全長 52～66cm。上・下面とも淡褐色地に黒い斑点があるが下腹部は白い。翼の下面と腰が白く、近縁種ホウロクシギとの識別のポイントになる。尾には白地に黒褐色の細い横縞がある。嘴が平均 16cm と非常に長く、大きく下に曲っているのが、ホウロクシギとともに最大の特徴。



ダイシャクシギ
海部郡飛島村飛島干潟、2011年9月19日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

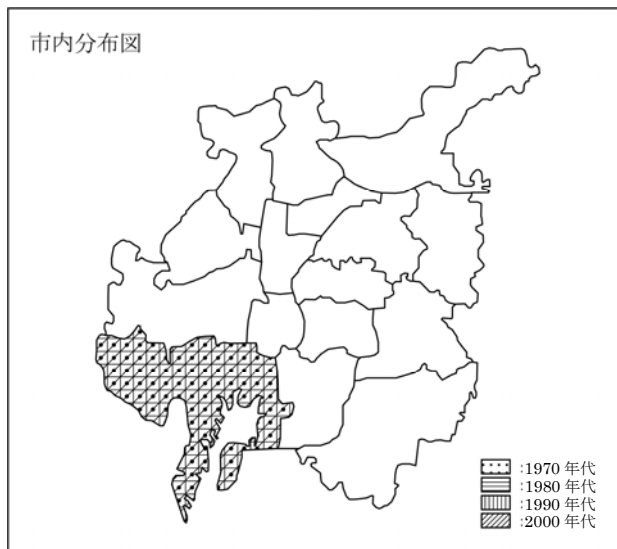
- 【市内の分布】
南西部でのみ記録されている。
- 【県内の分布】
伊勢湾奥部、三河湾沿岸部に渡来する。
- 【国内の分布】
全国に旅鳥として渡来し、本州中部以西では越冬もする。
- 【世界の分布】
アイスランド、ヨーロッパほぼ全域～アジア中部で繁殖し、ヨーロッパ中・南部、アフリカ～東南アジア等で越冬する。世界的には少なくともヨーロッパで減少しているとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

主として4～5月と8～9月頃渡来し、広い干潟でカニ、シヤコを主に、貝、ゴカイ、小魚、昆虫類等も捕食する（舌が短いためゴカイ等を吸い上げることは不得意）。越冬するものもある。カーリュー（英名 Curlew の語源、ホーイーンともクーヒーとも聞える。）とよく通る声で鳴くほか、ホーイ、ホーイとも鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の庄内川河口付近は県内でも有数の生息地で、1970年代には周辺を含めて20羽以上越冬していたが、1985年以降の記録は1985年12月7羽、1993年3月7羽、2003年2月9羽、2007年2月6羽、2007年2月6羽、2007年8月12羽（越夏）、2013年12月6羽、2014年3月6羽と減少している。最大型のシギで警戒性も強いいため、生息には広大な干潟を必要とする。各地での干潟の消滅・縮小が本種の渡来数を減少させていると推測される。



【保全上の留意点】

広い干潟の保全、更にはその沿岸部での湿地の保全・創出が望ましい。

【特記事項】

世界のレッドリスト（IUCN2014）でNTに指定されている。

【関連文献】

愛知 83:118, 愛知 95:67, 愛知 02:135, 愛知 06:68, 愛知 09:160, 分布 88:180, HBE3:500, HBW3:504, CBW1:436.

（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類

鳥類 <チドリ目 シギ科>

アカアシシギ *Tringa totanus* (Linnaeus)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市では以前から数が少ない鳥で、近年急速に減ってきた種類ではないが、渡り中継地としての採餌環境や安全性が低下すれば、今後姿を見せなくなる恐れもある。

【形態】

全長 25～29cm。夏羽の上面は褐色地に、下面は白地に、上下面とも黒い縦斑が目立つ。翼の基半部後縁（初列風切の一部と次列風切）と腰は白く、飛翔時明瞭な識別点となる。尾には白地に暗褐色の横縞がある。冬羽の上面は灰色がかり、上下面とも黒い縦斑は消えて胸に灰褐色の縦斑が残る。嘴は先が黒く基部が赤。脚は赤い。体との比例上、嘴も脚も近似種のツルシギより短い。

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部で記録されているが数は少ない。

【県内の分布】

鍋田地区、矢作川河口付近、汐川河口付近等で記録されているが、数は少ない。

【国内の分布】

数は多くないが広く旅鳥としての記録があり（春より秋に多い）、南西諸島では冬鳥。北海道東部では少数繁殖している。

【世界の分布】

アイスランド、イギリス、スカンジナビアからヨーロッパ、アジアの中緯度域で繁殖し、アフリカ～東南アジアへ渡って越冬する。1970年以降ヨーロッパでは減少している。

【生息地の環境／生態的特性】

ツルシギと同じく、海岸や河口部の干潟、海に近い水田、湿地等に単独または数羽で渡来し、昆虫類、小ガニ、小貝、ミミズ等を捕食する。ツルシギの群れに混じることもある。ピーチョイチョイとややアオアシシギに似た声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口部で記録(2010年9月2羽、2013年4月10羽、2013年9月4羽、2014年9月3羽など)があるが、いずれも数は少なく、稀な旅鳥と言える。周辺一帯での湿地環境（汽水域よりは淡水域）の減少が本種の生息に負に作用している可能性が高い。

【保全上の留意点】

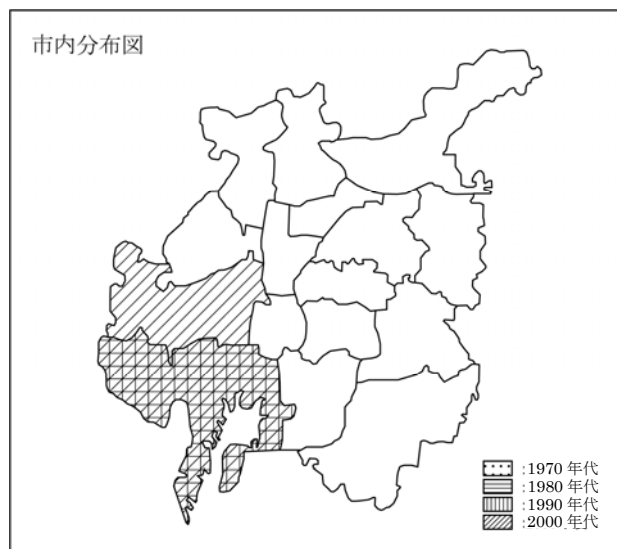
本種の個体数の少なさが何に起因しているかは明確でないが、沿岸部の湿地を保全することが、今後の本種の減少を抑制する必要条件の一つだと考えられる。

【関連文献】

愛知 83:108, 愛知 95:61, 愛知 02:133, 愛知 06:62, 愛知 09:157, 繁殖 78:162, 分布 88:168, HBE3:525, HBW3:509, CBW1:448.



アカアシシギ
港区庄内川河口、2009年9月26日、近藤 孝 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

オバシギ *Calidris tenuirostris* (Horsfield)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	リスト外

【選定理由】

今世紀初頭までは名古屋市南東部で 100 羽以上の群れを見ることがあったが、その後そのような大群の渡来はなくなった。当市だけでなく、国内各地での減少が目立っている。

【形態】

全長 26~28cm。夏羽では頭上から体の背面は黒っぽく、肩羽は赤褐色で、胸が黒い。冬羽では肩羽の赤褐色と胸の黒が消え、全体がやや淡色になる。若鳥は冬羽に似る。嘴と脚は黒い。飛翔時、翼に白線が出る他、腰が白く見える。

【分布の概要】

【市内の分布】

南部 3 区に旅鳥をして渡来するが、南区と緑区では記録されない年もある。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部の他、渥美半島の太平洋岸や知多半島にも、旅鳥として渡来している。

【国内の分布】

北海道、南千島、本州、隠岐、四国、九州、対馬、奄美諸島、琉球諸島に旅鳥として渡来している。

【世界の分布】

シベリア東部で繁殖し、アジア南部、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ニューギニア、オーストラリアへ渡って冬を越す。世界的に個体数は減少している。

【生息地の環境／生態的特性】

5 月下旬~6 月下旬頃、亜寒帯のアルパイン・ツンドラで繁殖し、渡り途中（4~5 月、8~10 月）の日本では海岸や河口の干潟に生息する他、海岸に近い水田や池沼で見られることもある。キツ キツまたはケツ ケツと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口付近での年間最多観測数は、2003 年 9 月 158 羽だったものが、2004 年 10 月 15 羽、2005 年 10 月 39 羽、2006 年 9 月 32 羽、2007 年 9 月 36 羽、2008 年 8 月 25 羽、2009 年 9 月 76 羽、2012 年 10 月 33 羽、2014 年 10 月 30 羽と、2 桁に減少している。繁殖地では、ヒナに昆虫（アブ・ハエの幼虫など）を与える他は、主として漿果・堅果などの植物質を食べ、渡り期・越冬期には干潟で二枚貝を中心に、巻貝・甲殻類・環形動物などを、更に水際を離れた砂礫地でヨコエビなどを食べる。中国では生息環境の縮小と渡り中継地での狩猟が、本種の生存への脅威になっているとの説があるが、わが国でも開発による生息環境の悪化が減少の主要因ではないか、と懸念される。

【保全上の留意点】

減少の原因は明確ではないが、干潟や湿地の保全がまず重要、と考えられる。

【特記事項】

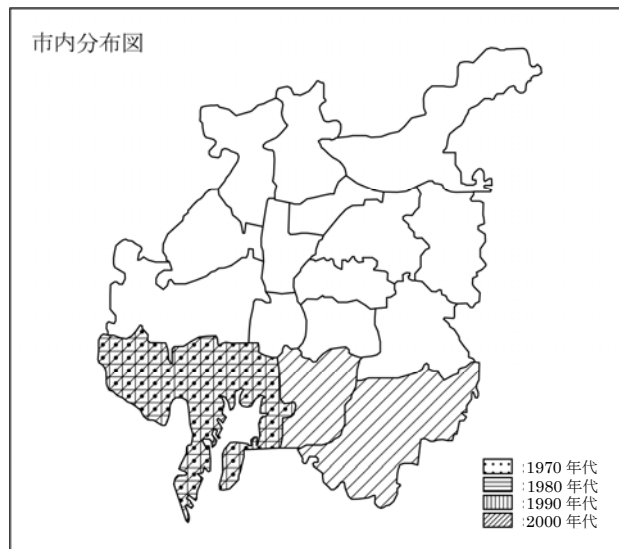
世界のレッドリスト（IUCN2014）で VU に指定されている。

【関連文献】

愛知 83:101, 愛知 95:58, 愛知 02:129, 愛知 06:58, 愛知 09:153, HBE3:268, HBW3:519, CBW1:438.



オバシギ（夏羽）
海部郡飛島村飛島干潟、2003 年 5 月 24 日、森井豊久 撮影



鳥類

(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

コオバシギ *Calidris canutus* (Linnaeus)

【選定理由】

1970年代には伊勢湾奥部で50羽同時に記録されたこともあるが、その後渡来数が減少し、近年、市内では毎年0か一桁台の記録しかない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	通過
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類
	リスト外

【形態】

全長23～25cm。夏羽は全体に茶色っぽく、背面には黒と白の細かな斑紋模様がある。冬羽の背面は灰黒色で各羽縁が細かく白い。冬羽の腹面は白く、頭から胸・脇にかけて灰褐色の縦紋がある。若鳥は冬羽に似る。嘴は黒く、脚は暗いオリーブ色。飛翔時、翼に細い白線が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口部付近でのみ、旅鳥としてごく少数が記録されている。

【県内の分布】

伊勢湾奥部、矢作川河口部、豊川河口部、汐川河口部で、旅鳥として少数が記録されている。

【国内の分布】

海道、南千島、本州、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島で、旅鳥として少数が記録されている。

【世界の分布】

シベリア北部および東部、アラスカ、カナダ北部、グリーンランドなどの北極圏で繁殖し、南へ渡って冬を越す。越冬地はスコットランド～アルゼンチン、チリ、アフリカ西・南岸、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランドと広範囲にわたる。世界的に特に減少しているとの報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

6月頃、北極圏のツンドラで繁殖し、渡り途中(4～5月、8～10月)の日本では海岸や河口の干潟に生息する他、海岸に近い水田や池沼で見ることがある。他のシギ類、特にオバシギの群中にいることが多い。旅鳥だが、春には少ない。ノット聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1973年、隣接する飛島村飛島干潟で50羽の記録があるが、以後そのような多数の渡来はなく、1983年10月2羽、1988年4月1羽、2004年10月3羽、2007年5月4羽、2010年9月8羽、2014年10月2羽(何れも庄内川河口部)など、渡来記録は極く少ない。双翅目・鱗翅目・毛翅(トビケラ)目などの昆虫も食べるが、干潟では二枚貝や巻貝を多く捕食する。減少の原因は不明だが、他のシギ・チドリ類が好むゴカイや甲殻類を比較的好まないやや特殊な餌の好みに影響しているものか、詳しい調査が必要である。外国では人による貝の取り過ぎや、レクリエーションでの干潟の利用のし過ぎ、航空機の飛び過ぎなどが餌場の不安定化につながっている、と警告する声がある。

【保全上の留意点】

減少の直接原因が不明なので対策は難しいが、干潟と沿岸部の湿地の保全は不可欠と考えられる。

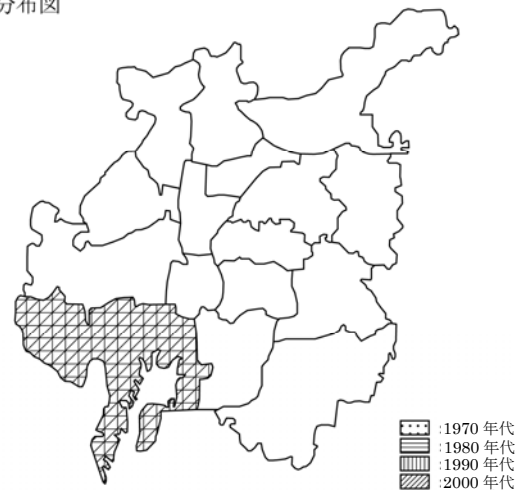
【関連文献】

愛知 83:100, 愛知 95:58, 愛知 02:128, 愛知 06:57, 愛知 09:152, HBE3:271, HBW3:519, CBW1:438.



コオバシギ
港区藤前、2014年8月16日、近藤 孝 撮影

市内分布図



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <チドリ目 シギ科>

ハマシギ *Calidris alpina* (Linnaeus)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

冬の干潟の主役。かつては庄内川河口部で1万羽を超える群れが観察され、国内最多の記録となったが、その後漸減し、2015年3月現在の総数は1,000羽に達していない。今後回復する可能性も無くはないが、保全が手遅れとならないよう対応することが緊急の課題である。

【形態】

全長 19～23cm。嘴は黒く長めで、やや下に曲がっている。足も黒い。夏羽の上面は赤褐色地に黒褐色の斑点があり、下面は腹の大きな黒斑以外は白っぽい。冬羽の上面は灰褐色で下面は汚白色（黒斑は無い）。飛翔時、翼に細い白線が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

秋期、主として南西部の干潟に群れて渡来し、翌春まで居残るものと、さらに暖地に渡って冬を越すものがある。

【県内の分布】

河口部に広がる干潟に、冬鳥または旅鳥として渡来するが、近年減少している。

【国内の分布】

北海道、南千島、佐渡に旅鳥、本州、四国、九州以南に冬鳥または旅鳥、琉球諸島には冬鳥として渡来する。

【世界の分布】

北半球の北部で繁殖し、温帯～熱帯に渡って越冬する。世界的に減少しているとの情報はない。

【生息地の環境／生態的特性】

主として海岸や河口の干潟に群れ、ゴカイや二枚貝、巻貝、トビムシ等の小動物を捕食する。小群で内陸の淡水環境を訪れることもある。干潟等で群飛する際は一斉に方向を転換するので、冬羽の白い腹をこちらに向けた時はきらめいて美しい。トウンネンやシロチドリと群れて採餌することもある。ジュリーと聞こえる声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口付近での年ごとの最多記録数の概略は、1987年3月に3,445羽、1992年4月に9,188羽、1993年5月に10,491羽、1994年4月に1,636羽、1997年3月に2,144羽、1998年5月に8,210羽、1999年11月に5,050羽、(2000年9月11日～12日の東海豪雨で被害が出た模様) 2000年12月に3,177羽、2002年2月に2,563羽、2005年5月に2,160羽、2009年11月に2,807羽、2010年11月に3,200羽、2011年5月に2,660羽、2012年11月に1,807羽、2013年11月に1,392羽、2014年3月に1,735羽、2015年2月に874羽の如くで、1993年と比べると2015年は1割以下に減っている。その減少の要因は解明されていないが、巨大な台風や河川工事が、干潟の自然な姿を破壊した可能性が考えられる。

【保全上の留意点】

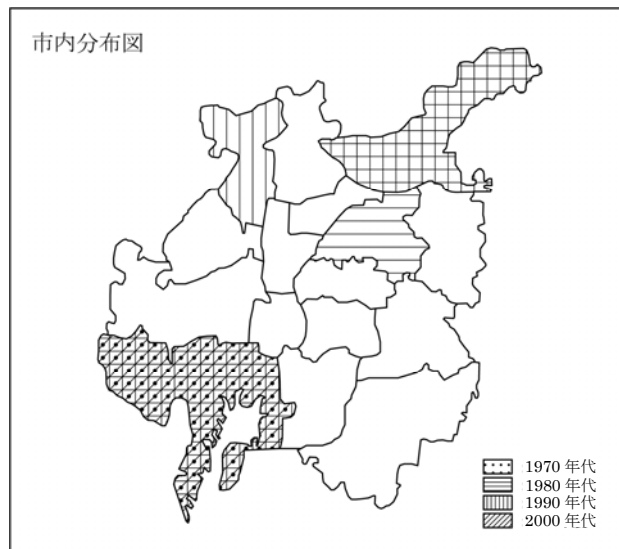
上記のように自然災害や改修工事が、干潟を代表するこの鳥の生息の障害になっている可能性があるため、工事の際には治水のほか干潟の生物多様性に留意し、さらに満潮時にシギたちが休む後背地(畑、草地等)の創出・保全にも配慮することが望ましい。

【関連文献】

愛知 83:98, 愛知 95:57, 愛知 02:156, 愛知 06:56, 愛知 09:177, 分布 88:160, HBE3:356, HBW3:526, CBW1:440.



ハマシギ
海部郡飛島村下川河口、2004年3月7日、森井豊久 撮影



鳥類 <チドリ目 シギ科>

エリマキシギ *Philomachus pugnax* (Linnaeus)

カテゴリー

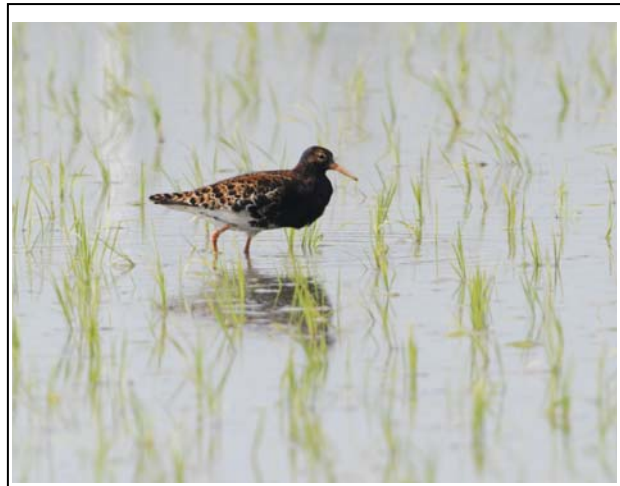
【選定理由】

元来数少ない旅鳥だったが、ウズラシギやタカブシギと同じく、干潟よりは後背の水田や湿地を好む鳥だけに、そのような淡水湿地が激減している市内では、今後深刻な減少が懸念される。

名古屋市2015	準絶滅危惧	
愛知県2015	通過	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外	

【形態】

全長雄 26~32cm、雌 20~25cm。雄の夏羽には頭上や首のまわりに栗色・赤褐色・暗紫色・白色・白黒の横縞模様などの派手な飾り羽があり、胸~腹は白く、胸側に暗色の斑点がある。雌の夏羽は上面と胸が淡褐色に黒斑、腹は白。冬羽は雌雄とも上面は淡灰褐色に黒っぽい斑があり、顔、胸は淡灰褐色で腹は白。



エリマキシギ (雄、夏羽)
港区南陽町、2013年5月14日、森井豊久 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

南西部に旅鳥として少数飛来するが、越冬することもある。

【県内の分布】

おもに伊勢湾・三河湾の沿岸部（稀に内陸部）の湿地に旅鳥として渡来し、越冬することもある。

【国内の分布】

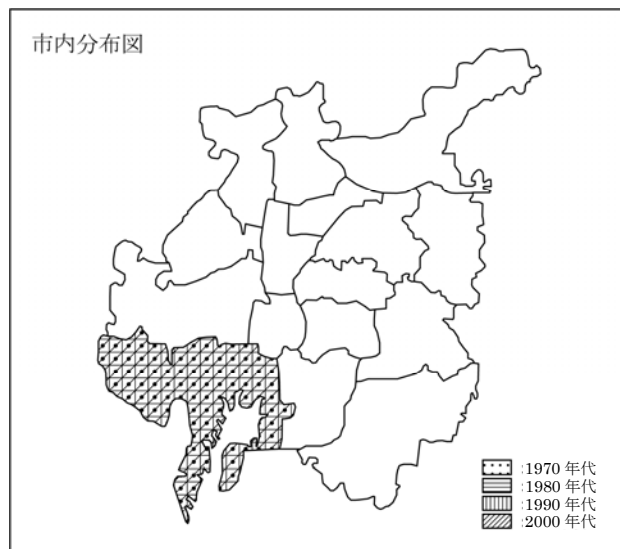
離島も含め、ほぼ全国に旅鳥として渡来する、春より秋の記録が多い。

【世界の分布】

ユーラシア北部で繁殖し、アフリカ・インド・東南アジアへ渡って越冬する。ロシア東部やイギリスでは、近年繁殖域や繁殖個体数が拡大・増加の傾向にあるという。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖地（寒帯～亜寒帯のツンドラ、ヨーロッパでは冷温帯の湿地・湿性草原でも）では複数の雄が集まって lek と呼ばれる求愛集団を作り、首まわりの羽を拡げてダンスする。当市でも春に見られる夏羽の個体の中には、稀にその動作の片鱗を見せるものもある。渡り期を含む非繁殖期には、干潟より耕地や淡水性の湿地で、昆虫・クモ・小型甲殻類・貝・小魚等の動物を主に、草の種子や植物も食べている。



【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市による5年ごとの一連の調査では、毎回港区で少数が記録されている。他に2004年11月2羽、2005年2月7羽、2006年9月1羽、2007年8月1羽、2010年9月5羽、2011年9月1羽、2012年9月1羽、2013年4月2羽、2013年12月3羽、2014年4月1羽の記録など（何れも港区庄内川河口付近）がある。アジア東部は本種の分布域の東端に近いことのほか、主要な生息環境である水田・池畔など淡水湿地の著しい減少が、渡来数の少ない理由の一つかと考えられる。

【保全上の留意点】

上述のように、水田等淡水性湿地の減少が本種の生息を制限している可能性がある。時代の流れには逆らえないが、市内のどこかに文化遺産としてでも水田を遺すことが望ましい。

【関連文献】

愛知 83:104, 愛知 95:59, 愛知 02:131, 愛知 06:59, 愛知 09:155, HBE3:385, HBW3:530, CBW1:438.

(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <タカ目 ミサゴ科>

ミサゴ *Pandion haliaetus* (Linnaeus)

【選定理由】

市域の南西部では近年（特に冬期）増加の傾向にあるが、全国的には減少しており、存続の基盤は未だ安定していないと判断される。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖 越冬 絶滅危惧Ⅱ類 リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

全長雄約55cm、雌約64cm。ほぼトビだが、翼は細長く尾は短め。頭は白く、過眼線が黒い。体の上面は黒褐色。下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。若鳥の上面には淡褐色のうろこ模様がある。魚食鳥として進化し、前後に2本ずつ向く脚指を持つ。

【分布の概要】

【市内の分布】

近年広く記録されている。

【県内の分布】

平野部で広く観察されるが、数は多くない。主として冬鳥・旅鳥だが、夏期の記録もある。

【国内の分布】

北海道、本州、南千島で夏鳥、本州以南では留鳥。

【世界の分布】

ユーラシア、北アメリカ、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアなどで繁殖し、北部のものは南アメリカ、南アジア、アフリカなど南へ渡って冬を越す。世界での個体数はほぼ安定していると見なされている。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や湖沼に生息し、岩棚上や大木の梢に（近年は人工的な鉄塔の上でも）営巣する。春・秋の移動期には内陸で見られることもある。水面上で停空飛翔をしてねらいを定め、急降下して中・大型の魚をつかみ取る。キョッキョットかキッキットと聞こえる高い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、近年熱田区を除く全区で記録があり、その多くは通過個体だが、港区の庄内川、新川、日光川河口付近には周年生息し、1998年11月3羽、1999年10月4羽、2000年1月7羽、2002年7月6羽、2002年10月19羽、2003年10月16羽、2004年12月15羽、2006年10月15羽、2007年10月34羽、2008年10月35羽、2010年9月34羽、2011年10月38羽、2012年11月42羽、2013年12月41羽と、年を追って増加している。近隣地での繁殖の可能性も示唆される。

【保全上の留意点】

専ら魚を餌とし、特殊な進化を遂げた鳥だけに、激変する環境への適応性は高くはないと思われる。現在の主生息地である庄内川河口部一帯の餌場としての保全がまず必要である。

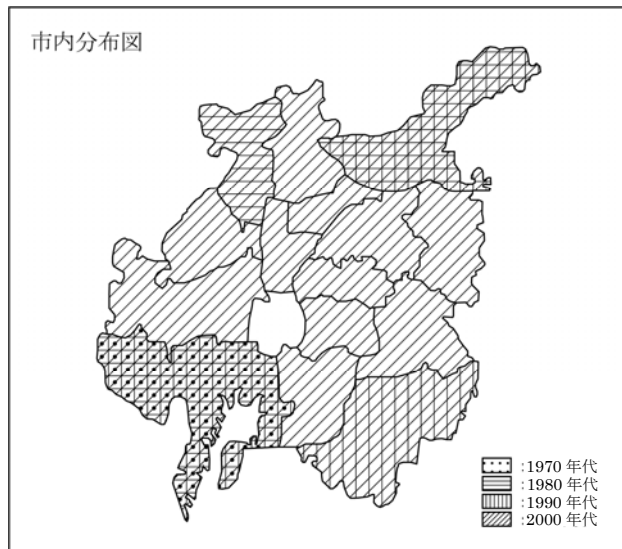
【関連文献】

愛知 83:60, 愛知 95:35, 愛知 02:120, 愛知 06:34, 愛知 09:145, 分布 88:103, HBE2:265, HBW2:51, CBW1:518.

(執筆 小笠原昭夫)



ミサゴ
海部郡飛島村、2009年9月11日、森井豊久 撮影



鳥類

鳥類 <タカ目 タカ科>

ツミ *Accipiter gularis* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	繁殖	準絶滅危惧
愛知県	通過	リスト外
2015	通過	リスト外
環境省2014		リスト外

【選定理由】

小型ながら食物連鎖の上位に立ち、健全な生態系を指標する種の一つである。市内に少数生息し繁殖の例もあるので、生息環境の保全に努めて、更に安定した個体群にすることが望まれる。

【形態】

全長雄約27cm、雌約30cm。日本産では最小型のタカ。成鳥の上面は暗青灰色。雄の下面は白っぽく、胸側～脇が淡い赤褐色。雌の下面は白地に黒褐色の横斑がある。若鳥は上面黒褐色で、下面は白地に黒褐色の縦斑(胸)と横斑(腹)がある。翼が短めで翼端が丸みを帯び、尾羽が長い点など体形はオオタカ、ハイタカに似るが、大きさの差は顕著。

【分布の概要】

【市内の分布】

主に東部、北部に記録が多い。

【県内の分布】

平野～山麓にかけて広く記録されているが、繁殖記録は作手村などの少例のみ。秋、伊良湖岬を渡る数は1シーズンに1,000羽程度。

【国内の分布】

広く分布し、繁殖地も北海道、南千島から沖縄に渡るが記録は比較的少ない。

【世界の分布】

アジア東部の中緯度域で繁殖し、その多くは東南アジアで越冬している。世界での個体数に関する情報は十分でない。

【生息地の環境／生態的特性】

低山帯の雑木林に生息し、林内や周辺の農地等で小鳥や小型の哺乳類、昆虫類等を捕食する。攻撃的な習性が強く、自分より大きい他鳥を擬攻撃する姿がよく見られる。5～8月頃、樹上に小枝を積み重ねて皿形の巣を作り、3～4卵を産んで繁殖する。キーキーキキキキと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では秋の通過と越冬例が主だが、守山区、名東区、天白区などでは繁殖例がある。2003年春、昭和区鶴舞公園でも繁殖の徴候があったが、恐らく人による妨害で不成功に終わった。

【保全上の留意点】

生息・営巣環境としての緑地の保全や街路樹の育成がまず望まれる。また前項でも触れたように、人の接近が繁殖を失敗させる可能性も低くないので、撮影目的などでの長時間に及ぶ接近は慎みたい。更に他の多くの種についても言えることだが、カラスによる繁殖障害が懸念される。近年名古屋市でも生ごみを食べるカラスが増えてきたため、本種等への影響にも注目する必要がある。

【特記事項】

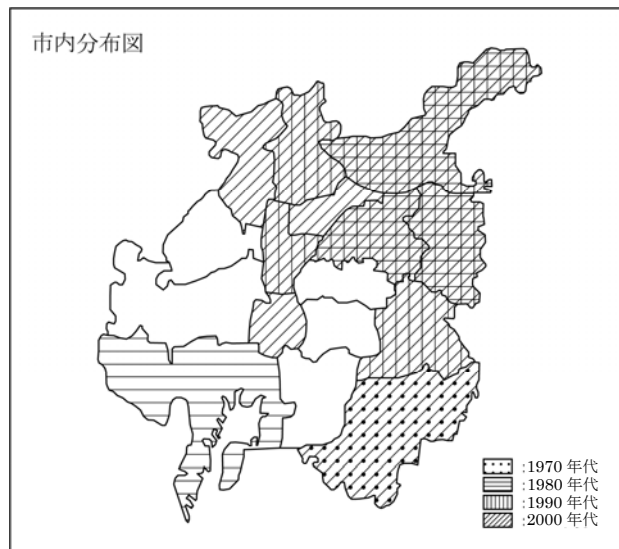
近年、首都圏を中心に人家周辺で営巣する例が増えてきている。

【関連文献】

愛知 83:65, 愛知 95:38, 愛知 02:121, 愛知 06:36, 愛知 09:147, 分布 88:107, HBE2:148, HBW2:155, CBW1:542.



ツミ (雄)
名東区神丘公園、2010年7月5日、矢田和子 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <タカ目 タカ科>

ハイタカ *Accipiter nisus* (Linnaeus)

【選定理由】

名古屋市では緑地に富む東部に記録が集中している。記録漏れもあると思われるが、現状を見る限り準絶滅危惧種から外すにはやや安定さに欠けると判断される。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	越冬 国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

全長雄約32cm、雌約39cm。先に丸みがある短めの翼と長めの尾をもつ。雄の上面は暗青灰色で、黒い過眼線とその上に白い眉線がある（雌にも）。下面は白地に赤褐色の横斑がある。雌の上面は灰褐色で、下面は白地に褐色の横斑がある。若鳥の上面は褐色で、下面は白地に黒褐色の縦斑（のど）、横斑（胸・腹）がある。尾にはいずれも4本の黒っぽい帯がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

近年記録地は広がっているが、個体数は少ない。東部には繁殖の記録もある。

【県内の分布】

おもに秋～春、平地から低山で広く記録されているが数は少ない。

【国内の分布】

本州以北で繁殖し、ほぼ全国で越冬する。

【世界の分布】

ユーラシアとアフリカ北西部で繁殖し、北部のものは南下して越冬する。1950～60年代有機塩素系殺虫剤によって激減し、その後回復してきたとされる。

【生息地の環境／生態的特性】

春夏は山地の林、秋冬は低地～低山の林に生息し、小鳥類を主に、小型哺乳類、昆虫類等も捕食する。5～6月頃、アカマツ等の樹枝上に小枝を積んで皿形の巣を作り、4～5卵を産んで繁殖する。キキキキキキと鳴く声はオオタカに似るが、ややテンポが速い。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内でかなり広く記録されている。守山区、名東区、千種区、天白区、緑区の東部5区ではほぼ調査年ごとに記録され続け、天白区では繁殖の記録もある。現時点では特に著しい減少の傾向は認められない。

【保全上の留意点】

市内で（県内でも）繁殖の記録は少ないが、林にすみ、その周辺で採餌する種類であるため、緑地の保全が必要である。

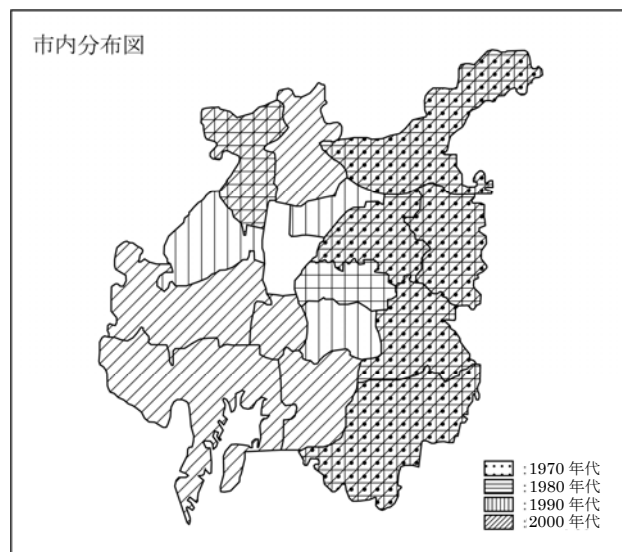
【関連文献】

愛知 83:66, 愛知 95:38, 愛知 02:123, 愛知 06:37, 繁殖 78:118, 分布 88:109, HBE2:158, HBW2:158, CBW1:542.

（執筆者 小笠原昭夫）



ハイタカ（雌）
天白区相生山緑地、2011年2月5日、前田 崇 撮影



鳥類

鳥類 <タカ目 タカ科>

オオタカ *Accipiter gentilis* (Linnaeus)

【選定理由】

近年市内各地で散見されて見かけ上増加しているが、以前よりも観察網が密になったためかも知れず、本種の安定的増加を示すかどうかは断言できないので、準絶滅危惧と評価した。

カテゴリー

名古屋市2015		準絶滅危惧
愛知県	繁殖	準絶滅危惧
2015	越冬	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長雄約50cm、雌約56cm。ほぼカラス大のタカで、先に丸みがある短めの翼と長めの尾をもつ。成鳥の上面は暗灰色で、目から後方が黒く、白い眉線が目立つ。下面は白地に黒く細い横縞模様がある。尾には4本の黒っぽい横帯がある。若鳥は上面褐色で、下面には暗褐色の縦斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

ほぼ全域で観察され、近年記録は増す傾向にある。

【県内の分布】

里山を中心に広く分布し繁殖している。

【国内の分布】

本州以北で繁殖し、季節による大きな移動はしない。

【世界の分布】

北半球の温帯から亜寒帯にかけて広く繁殖し、やや南下して越冬するものもある。19世紀から20世紀にかけて世界的に減少したが、現在は減少は止まったと考えられている。

【生息地の環境／生態的特性】

営巣環境である高木を含む林と、採食環境である林縁部や農耕地とが混在する里山に生息し、中・小型の鳥やヘビ、リスなどを捕食する。より山地を好むクマタカ、イヌワシと異なり、生息環境が人の生活域と接するため、開発事業で話題になることが多い。近年記録が増えているのは、現実に数が増えたのか、発見される機会が増えただけなのか不明。マツなどの高木に営巣し、4～5月頃3～4卵を産んで繁殖する。キッキキッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

図からは読めないが、市の東部では1980年代後半からの記録が多く、繁殖の報告もある。市の中部、西部の記録はほとんどが1990年代以降のもので、しかも2ヶ月、3ヶ月と連続記録されている地域もあることから、現実に増加している可能性がある。しかし、安定して増えているかは即断できない。

【保全上の留意点】

前項記述のように、今後継続して動静を調査・分析するとともに、営巣環境の保全措置（林や大木の保全、場合によっては飛翔空間を確保するための林内整備等）を講ずる必要がある。

【特記事項】

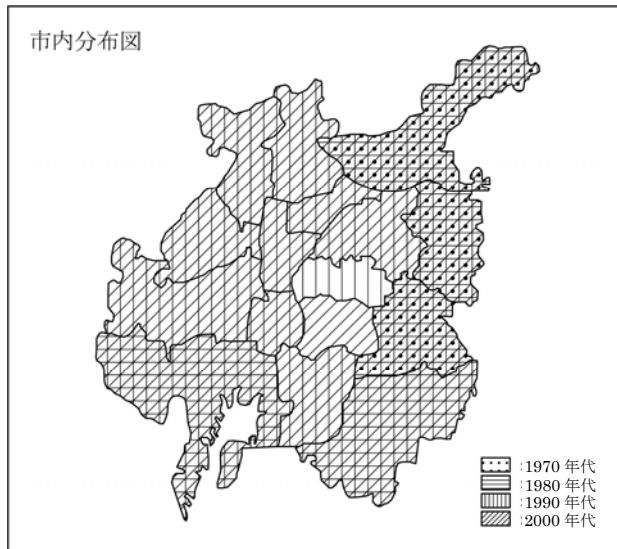
里山の食物連鎖の頂点に位置する代表的な種類として、本種は健全な生態系の指標とされる。本種自体の保全ばかりでなく、里山の環境変化の目安としても、本種の動静に注目する必要がある。「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」により、国内希少野生動物種に指定されているが、近年指定解除への動きもある。

【関連文献】

愛知 83:64, 愛知 95:37, 愛知 02:121, 愛知 06:35, 愛知 09:146, 分布 88:107, HBF2:148, HBW2:162, CBW1:544.



オオタカ (若鳥)
港区庄内川河口、2013年11月23日、近藤 孝 撮影



(執筆 小笠原昭夫)

鳥類 <フクロウ目 フクロウ科>

オオコノハズク *Otus lempiji* (Horsfield)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県	繁殖
2015	越冬
環境省2014	リスト外

【選定理由】

目立たない鳥のため記録は少ないが、その僅かな記録からも、名古屋市が越冬地または移動時の通過地として利用されていることが推測される。

【形態】

全長 23~26cm。体は褐色で、上面には黒褐色や黄褐色の虫食い状の斑があり、後頸に淡い灰褐色の斑がある（この斑はコノハズクにはない）。下面には黒褐色の縦斑がある。翼の下面は淡褐色で、風切羽と尾には黒褐色の横縞がある。頭に羽角があり、目は赤橙色（コノハズクは黄色）。嘴は黒い。

【分布の概要】

【市内の分布】

東部に僅かな記録がある。

【県内の分布】

低地から山地まで記録は散在するが、夜行性で鳴き声も目立たないため、情報は十分でない（三河山地での繁殖記録がある）。

【国内の分布】

主要四島のほか南千島、佐渡、隠岐、対馬、五島列島、琉球諸島、伊豆諸島に留鳥または漂鳥として繁殖しているが数は多くない。

【世界の分布】

アジア南部~東部に留鳥として生息し、世界で特に減少しているとは見なされていない。

【生息地の環境／生態的特性】

低地~山地の林に生息し、夜間活動して小鳥類、ネズミ、モグラ、カエル、カニ、昆虫類、クモ等を捕食する。5~6月頃、樹洞に4~5卵を産んで繁殖する。コノハズクのような移動性はなく、ほぼ留鳥とされるが、冬には暖地に漂行するものもある。雄はホッホッホとかウオウオウと聞える声で鳴き、雌はミャーミャーと猫に似た声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録は、千種区東山公園で1985年3月、天白区相生山緑地で1979年10月・11月、1994年12月、1999年11月、南区大江川緑地で2004年11月、それぞれ1羽と乏しいが、記録洩れもあると思われ実態はつかみにくい。しかし、森林生の種だけに今も都市化が進み樹林が減少して名古屋市で、減少傾向にあることは否定できない。

【保全上の留意点】

実態は十分把握できないが、林地の保全を第一に、巣箱の仮設も試みる価値がある。

【特記事項】

従来アジア南~南東部及び周辺のをまとめてオオコノハズク (*O. bakkamoena*) としてきたが、羽色、眼の色、鳴き声等の違いから細分化され、日本産の個体は *O. lempiji* とされた。

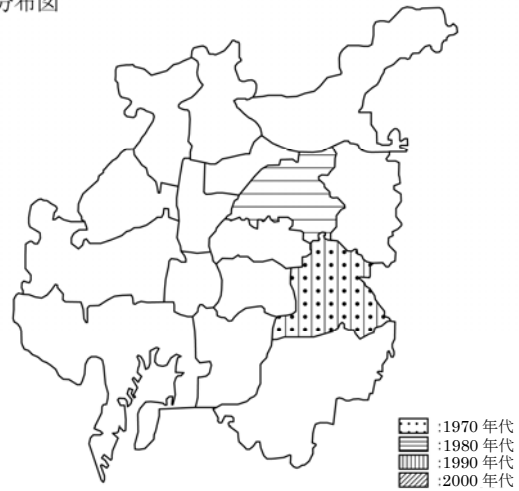
【関連文献】

愛知 83:146, 愛知 95:84, 愛知 02:152, 愛知 06:85, 愛知 09:165, 繁殖 78:214, 分布 88:221, HBW5:158, CBW1:494.



オオコノハズク
南区大江川緑地、2014年11月14日、矢田和子 撮影

市内分布図



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <スズメ目 サンショウクイ科>

サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* (Raffles)

【選定理由】

4月頃渡来し、9～10月頃渡去する夏鳥だが、国内各地で減少が報告され、名古屋市でも近年減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	繁殖 通過 国リスト
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

全長 19～21cm。雄は額が白く、頭頂から後頭と過眼線は黒い。背～腰は灰青色で、長めの尾羽は中央が黒く左右は白い。下面は白。翼は黒く、開くと上下面とも白い線が出る。雌は額の白が狭く、頭上～後頭は灰色。嘴と脚は黒い。

【分布の概要】

【市内の分布】

春と秋の渡り期に、主に市の東半部で見られるが、記録は秋の渡去期に多い。

【県内の分布】

夏鳥として渡来し、山地の広葉樹林で繁殖するが、1980年代以降個体数は減少している。

【国内の分布】

主要四島のほか佐渡、南西諸島で繁殖する夏鳥で、九州南部以南では越冬するものもある。個体数は各地で減少している。

【世界の分布】

中国東北部、ウスリー地方等で繁殖し、東南アジア、台湾、インドネシアで越冬する。世界的に減少していると考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、低山の広葉樹林に渡来する。高木の梢近くで、トンボ、アブ、カメムシ、ガ、コガネムシ等の昆虫類を捕食する。巢も通常高枝上に作り、5～6月頃、4～5卵を産んで繁殖する。緩い波形を描いて飛び、ジーリジリまたはヒリヒリヒリ（名の由来）と聞こえる声で鳴く。渡去期には群れて低地の林を通過していく。

【現在の生息状況／減少の要因】

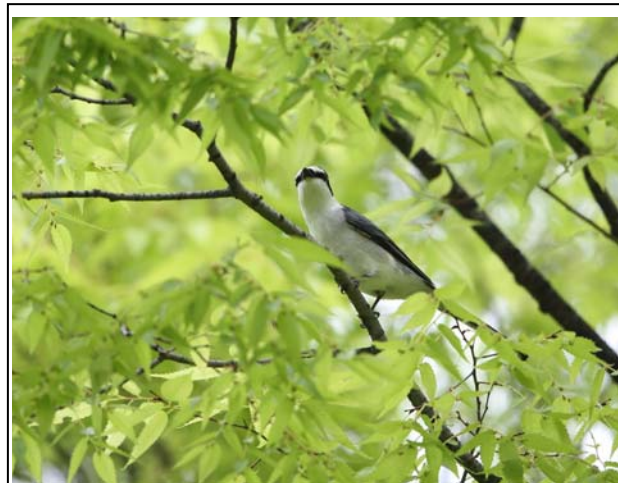
地図上の記録は多そうに見えるが、観察される機会・個体数とも近年減少している。1996年9月東山植物園 14羽、2003年8月天白区荒池 18羽、2006年9月東山植物園 16羽、2014年8月天白区相生山緑地 30羽等のまとまった数の記録は最近では珍しい。顕著な減少の原因は明らかでないが、低地～低山帯の広葉樹林の減少が原因の一つではないかと考えられる。

【保全上の留意点】

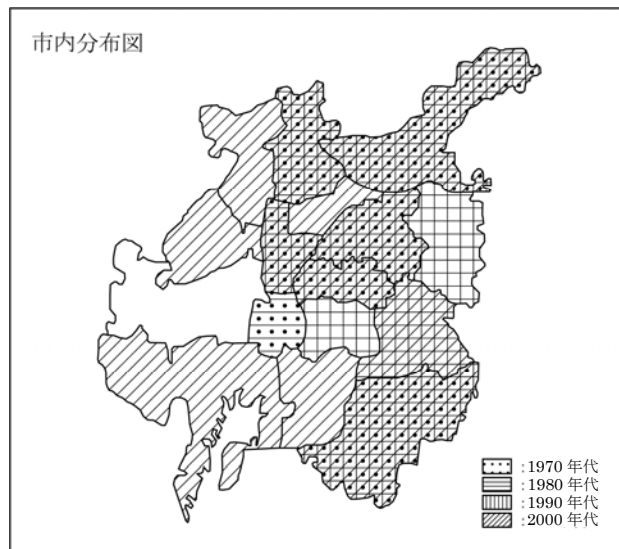
市内では緑地や公園の林を保全することが必要である。

【関連文献】

愛知 83:172, 愛知 95:97, 愛知 02:112, 愛知 06:98, 愛知 09:168, 繁殖 78:272, 分布 88:252, HBW10:113.



サンショウクイ
昭和区鶴舞公園、2014年4月22日、矢田和子 撮影



(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <キジ目 キジ科>

ウズラ *Coturnix japonica* Temminck et Schlegel

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県 2015	越冬 絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

観察記録が極めて稀な上、その僅かな記録中に飼育群からの脱出個体も混入している可能性があるため、野生種の現状把握はむずかしい。環境省自然保護局の判断では近年減少しているとされる。

【形態】

全長 19～22cm。上面は褐色で、白と黒の縦斑、横斑がある。下面は淡い黄褐色で、胸～脇に茶褐色と黒の縦斑がある。雄の夏羽の喉～頬は赤褐色。雌の喉、上胸には2本の黒褐色の横帯がある。開いた翼の上面は黄褐色地に黒褐色の横縞がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

確実な記録は1969年4月天白区野並1羽、1974年3月千種区覚王山3羽等ごく僅かで、名古屋市の生息状況調査では一度も記録されていない。

【県内の分布】

海部郡弥富町、幡豆郡一色町、宝飯郡一宮町、北設楽郡稲武町等に散発的な記録があるだけで、特に近年は報告が少ない。

【国内の分布】

本州中部以北で夏鳥として繁殖し、本州中部以西（南）で越冬するが報告は少ない。

【世界の分布】

モンゴル東部、中国東北部、ウスリー、サハリン等で繁殖し、韓国、中国南部等に渡って越冬する。世界での個体数に関する情報は不足している。

【生息地の環境／生態的特性】

耕地、草原、河原等に生息し、草の種子のほか昆虫類、クモ類等を捕食する。5～9月頃（時に10月にも）草の根元に少量の枯草を敷いて巣を作り、7～12個（時に18個も）の卵を産んで繁殖する。通常草蔭にひそんでいて滅多に姿を見せないが、繁殖期にはジュジュグーイットかジョッビグール等と聞える声で存在を知ることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録はごく僅かしかなく、特に近年の情報は少ない。草に隠れるようにして生活する鳥なので、草原が刈られたり、圃場整備が進んで草むらがなくなったりすると棲めなくなる。情報不足で現状の正しい把握ができず、近年減少している（らしい）原因も詳しくは解っていない。

【保全上の留意点】

当面は草原を維持することぐらいしか考えられないが、飼育場から抜け出た個体のことも考慮に入れて、保全策を検討していく必要がある。

【特記事項】

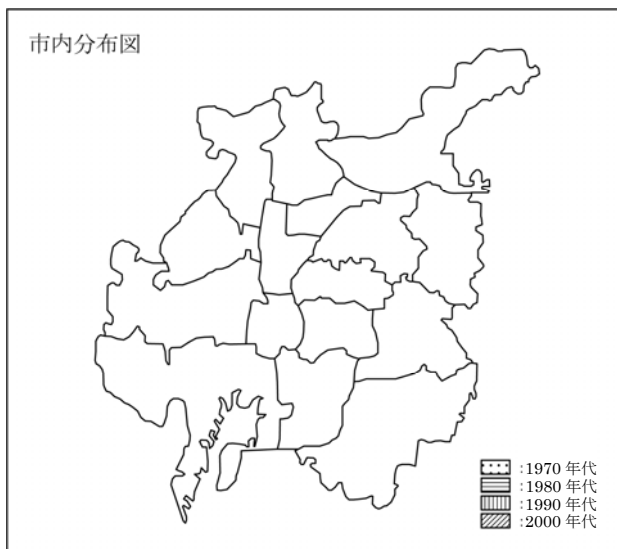
豊橋市を中心に多数飼育され、卵の出荷量は全国の70%を占める。ニワトリやアヒルと異なり1個体当たりの産卵数が多い以外、野生種との変異が少ないため、両者の識別は困難である。世界のレッドリスト（IUCN2014）でNTに指定されている。

【関連文献】

愛知 83:76, 愛知 95:43, 愛知 02:148, 愛知 06:42, 愛知 09:123, 繁殖 78:130, 分布 88:125, HBW2:509, CBW1:94.



ウズラ（雄）
弥富市鍋田千拓、1982年4月25日、森井豊久 撮影



鳥類

（執筆者 小笠原昭夫）

鳥類 <チドリ目 シギ科>

シベリアオオハシシギ *Limnodromus semipalmatus* (Blyth)

カテゴリー

【選定理由】

春・秋の渡り期に干潟や沿岸部の湿地を訪れるが、渡来数が極めて少なく、安定した生息状況とは言えない。県内には湿地の埋立てによって、近年渡来が途絶えた地域もある。

名古屋市2015	情報不足
愛知県 2015	通過 絶滅危惧 I A類
環境省2014	情報不足

【形態】

全長 33～36cm。夏羽は上・下面とも赤褐色で、黒褐色の斑と白い羽縁が目立つ。冬羽の頭上は灰褐色に黒い縦斑。体の上面は黒褐色で白い羽縁がある。冬羽の下面は白く、頸や胸側に灰褐色の縦斑がある。若鳥は冬羽に似るが上・下面とも黄褐色味が強い。嘴と脚はともに長くて黒い。ややオオソリハシシギに似るが、体の大きさ、嘴の形と色、脚の長さ、静止時の後頭部が突き出たような形等で識別する。



シベリアオオハシシギ (左から2羽目：夏羽)
港区庄内川河口、2009年8月19日、近藤 孝 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

春と秋に南西部で観察された記録があるが数は極めて少ない。

【県内の分布】

矢作川河口付近と汐川干潟に僅かな記録がある。

【国内の分布】

稀な旅鳥として主要四島と琉球諸島に渡来している。

【世界の分布】

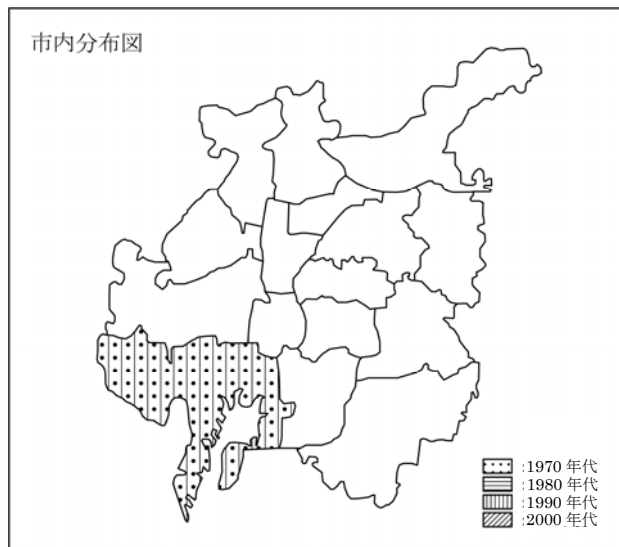
アジア中・東部で飛石状に繁殖し、アジア東南部～オーストラリアで不連続に越冬するが、ロシアのレッドデータブックに登載されるなど、世界的にも減少の傾向にある。

【生息地の環境／生態的特性】

ごく稀な旅鳥として渡来し、干潟や沿岸部の湿地でゴカイ・貝・甲殻類・ミミズ・昆虫類等を捕食するが、詳しい生態は解っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口付近で1978年8月20日1羽、1986年9月7日1羽、1999年5月9～10日1羽、2009年8月1羽の記録があるだけで、県内、国内でも極めて稀にしか記録されていない。かつて毎年のように渡来していた西尾市一色町で、湿地の埋立てとともに渡来が途絶えた経緯がある。



【保全上の留意点】

世界的な稀少種で、情報が極めて乏しいが、干潟とその周辺の湿地を主な採餌地・休息地としているので、そのような環境を保全することが必要と考えられる。

【特記事項】

世界のレッドリスト (IUCN2014) で NT に指定されている。

【関連文献】

愛知 83:249, 愛知 95:151, 愛知 02:148, 愛知 06:61, 愛知 09:96, HBW3:498, CBW1:440.

(執筆者 小笠原昭夫)

鳥類 <スズメ目 ホオジロ科>

ノジコ *Emberiza sulphurata* Temminck et Schlegel

カテゴリー

【選定理由】

繁殖地が日本だけで、しかも繁殖が局地的という不安定な種。情報不足だが、気付いた時には減少が加速して絶滅に向かっていたということになる可能性がある。

名古屋市2015		情報不足
愛知県	繁殖	絶滅危惧 I A類
2015	通過	準絶滅危惧
環境省2014		準絶滅危惧

【形態】

全長 13.5~14.8cm。雄の頭部は灰緑色で、目の周囲が細く白い。目先は黒っぽく、背は灰色がかった黄緑色に黒褐色の縦縞がある。下面は褐色がかった黄色で、脇に僅かに灰緑色縦斑がある。雌は雄に似るが、頭部の色が淡く、目先が黒くない。アオジに似るが、アオジの下面は本種よりやや緑がかり、脇の縦斑が目立ち、目の周囲が白くない。

【分布の概要】

【市内の分布】

春と秋に東部での記録がある。

【県内の分布】

春と秋に平野部で観察されているほか、三河山地では繁殖記録もあるが、市内、県内とも情報は少ない。

【国内の分布】

夏、本州中部、北部の比較的限られた地域で繁殖し、西日本を旅鳥として通過する。

【世界の分布】

日本以外に繁殖地はなく、中国南東部の狭い区域、台湾、フィリピン等で越冬する。20世紀を通じて減少してきたと見なされている。



ノジコ
北設楽郡豊根村茶白山、1990年7月7日、森井豊久 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

夏期、本州中部、北部の山地の林に生息し、昆虫類、クモ類、草の種子等を食べている。5~7月頃、樹枝上に作った巣に3~5卵を産んで繁殖する。春・秋の渡り期には低地の河川敷の藪や耕地等、繁殖期より開けた所にも出る。チチーチチヨチチヨチチチとアオジより早口につややかな声でさえずる。地鳴きはチッ、チッと一声ずつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市の生息状況調査での、1984年10月千種区平和公園1羽、1989年5月天白区大根池1羽、同年9月平和公園1羽の3つの記録のほかは、2001年4月緑区氷上姉子神社2羽（雄雌）、同年10月千種区平和公園1羽、2014年5月同所で1羽（雄）などの散発的な記録があるだけで、極めて情報に乏しい。

【保全上の留意点】

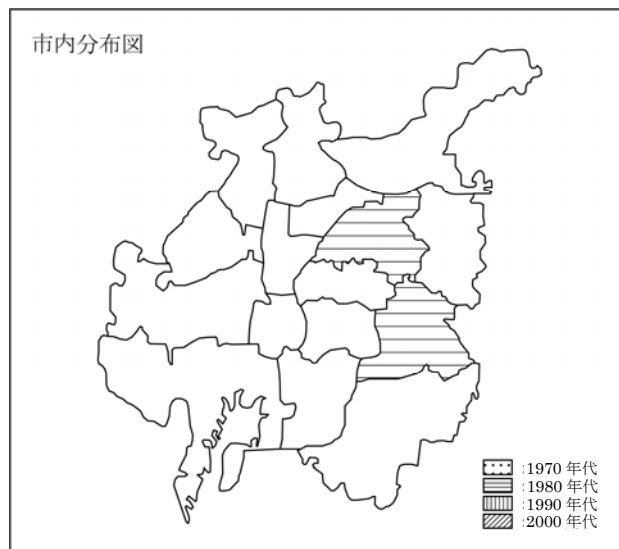
局地的分布を示す理由等、未知の分野が多い種なので、これまでより精度の高い調査結果の蓄積が望まれる。

【特記事項】

世界のレッドリスト(IUCN2014)でVUに指定されている。

【関連文献】

愛知 83:222, 愛知 95:124, 愛知 02:153, 愛知 06:126, 愛知 09:142, 繁殖 78:380, 分布 88:303, HBW16:533.



鳥類

(執筆者 小笠原昭夫)

【国リストの新規掲載種について】

今回の見直しによって新たに「国リスト」に掲載された種について、対象種が名古屋市では絶滅危惧種と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. ケリ *Vanellus cinereus* (Blyth)

チドリ目 チドリ科 (国：情報不足)

市内では、ある程度の数が観察され、周辺特に西部に比較的安定した個体群が生息するので絶滅危惧の対象種とは判定しなかった。